
世界のやさしい壊し方

るい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界のやさしい壊し方

【Nコード】

N18760

【作者名】

るい

【あらすじ】

世界を壊したいと願う少女と巻き込まれ少年の二人を中心に世界に立ち向かうチームの面々。たった十一人で世界に宣戦布告する。この十一人が織り成す世界を変える物語。

「この世界を変える（こわす）」

プロローグ 〈Prologue〉 (前書き)

内容がぶっ飛んでいますですが気長にお付き合いください。

プロローグ (Prologue)

この手紙には如何なる意味があるのか。組織の代表者である彼女には全く理解不能の代物であった。

彼女は言う。あるいは言った。

あるいは。

「明夢。私にはこれが分からない。全く分からないのだよ。意味ではなく意図が。」

これを私達知ることによって相手が得ることがあるのだろうか。

確かに内部分裂を誘発させるということでは効果的かもしれない。しかしこの時機にこれを送りつけても効果は薄い。そもそも所在地が知られているのならば、直接ここに部隊を寄越せばいいだろう。大義名分などいくらでも立つだろう。ではなぜ通知のみなのかだろうか？

何らかの理由があるのか。部隊を送ることが出来ない事情が生じたのか。あくまでも内部から瓦解するのを待つ姿勢なのか。

意図は分からない、伝わらない。ないのかもしれないし、読み取れないだけかもしれない。だが人物像が見えなかったのは初めてだ」

僕は、大丈夫だろうかと心配した。顔に不安が出ていたためか、彼女は問題ないと断言し僕の肩を手で数回叩いた。

少しばかり痛かった。

「明夢、心配は要らない。正確に言えば、見えないというわけではないのだ。あらゆる可能性を疑っているから、絞り込むのに時間が掛かるという意味だ。」

今持つ情報のみでは、判断し難いが幸いなことに私は策士だ。別に正解を出す必要はない。周りが納得するだけの正当性を付帯させておけばいい。とりあえず先にやるべきことは終わらせなければな

彼女はそういつて、こんな状況の中平然と笑って見せた。

プロローグ 〈Prologue〉 (後書き)

今後の展開しだいでは時系列が少し分かりにくいかもしれませんが。

プロローグにしてエピローグ ~ Prologue besides Epilogue

1000字ジャストです。

だからなんだって話ですが。

都心に程近い高級ホテルの一室。三十畳ほどあるその部屋にとある目的のために集合した十人のメンバーを僕は見渡す。

僕を入れれば十一人なんだけど、できることなら入れて欲しくないというか、この常軌を逸したメンバーの仲間入りをしたくないのが正直な所だ。他の人たちは、僕が一番変わりものだって言うんだけど、客観だろうが主観だろうが、僕が唯一の常識人であることを証明するのは、世界を破壊することや、この十人に連続で勝つことより遥かに易しいことだと思う。

部屋の中央には、一体いつの間はどうやって運んできたのか十三人は座れるであろう巨大な円卓が堂々と鎮座しており、現時点で一席が埋まっている。

卓上には様々な料理がズラリと並び、テーブルを回転させ好きなものを自由にとって食べる形式になっている。

円卓を囲むように座る八人は、僕と南萌、そして先ほどより熱弁を揮っている仄火ほのかが集めてきた、世界屈指の人材といっても過言はない人たちだ。ただし様子を見るに、仄火の演説を熱心に聞くもの、目を瞑っているもの、こそそ密談を交わしているもの、カードをシャッフルしているもの、眼前にある豪華な食事（自分で言うのもなんだが）を断りなく平らげていくものたち、また目を瞑って……違う！ この人、眠ってるよ。振りとかじゃなくてマジで寝てますよ、誰か。とまあ色々だ。個性豊か過ぎると言うか集団行動もできないと言うか、そこ堂々とおかわり要求するな。

僕の隣で直立し、果たして本当に聴いているのか怪しい人たち（この場合僕も含むのか？）に弁論を続ける仄火に、同情しつつ話を聞くことにする。

「……のために私の招聘しやうへいを受諾じゆたくしこの場に集まってくれた同志の諸君にまず感謝の意を述べたい。さて、当初私一人で実現させようとしたこの計画だが、予期せぬ形で彼が加わり、南萌みなも、花蘭からん、一はじめ、勇神ゆうしん、幸音ゆきね、綺音あやね、雲母きりり、八雲やくも、和のどかが、それぞれ利害や信条はあるだろうが、これだけの人材が計画への参加を表明してくれたことで、私も大幅な計画の変更に取り掛かることが可能となった。目標は一年だ」

このときばかりはメンバー全員が仄火の宣言を一字一句聞き漏らすことはなかった。

「私は、私たちはこの世界を完膚なきまでに壊す。現在の腐敗した世界を無慈悲なまでに消滅させる」

A s i d e 1 — 1 (前書き)

昔に書いたものですので、文章的に稚拙なところがあるかとおもいますが、ご容赦ください。

A s i d e 1 — 1

A s i d e 1

零

この世界に絶望していた。
この世界に恐怖していた。
この世界に戦慄していた。
この世界に恐慌していた。
この世界に恐怖していた。
この世界に隷従していた。
この世界に服従していた。
この世界に帰順していた。
この世界に偽善していた。
この世界に忌憚っていた。
この世界に××していた。
この世界に………。
この……

一

平凡で退屈で希望はなくて自由なんかどこにもなくて、表面上はその辺にいるガキと大して変わらないけどやっぱり一縷の幸福でさえなくて、死ぬまでこのままなんだろうな。なーんて人生を悲観してみたって何にも変わらないし、そんな哲学じみたことを考えてる暇があればバイトでもして生活費を稼いでるっての。嘘だけ。

お金にはそんな困ってない。自由に使える分はないけど不自由するほどじゃない。

六限目を知らせるチャイムが鳴り、思考を終了させる。

学園の放課後は、ほかの学校よりやや早い三時半からだ。

一応制服の胸ポケットから携帯電話を取り出し時刻を確認するが三時半の二分前。時間に正確ではなかったが、早い分には問題なんてあるはずがない。

そろそろかな。

僕は学校の屋上の涼やかなコンクリートを惜しみつつ立ち上る。屋上は日陰になっており風も吹いているから都合が良かった。実際のところ授業は午前中で終了してたから、残っている必要はないんだけど家に帰ればアレがいる可能性があるから時間までここで時間潰しをしていたのだ。

制服に付着した汚れを手で叩いたが、思うように落ちなかった。後で洗濯すればいいだろう。

重量のある扉を開け、階段を二段飛ばし、は運動能力の問題で無理なので一段飛ばしで降りていく。昇降口の下駄箱で靴を履き替え、帰宅しようとすると思知った顔がそこにあった。

「アレ、黒坂明夢？　どったの、こんなところで？」

僕のことをフルネームで呼ぶのは彼女しかいない。名前自体を呼ぶ人が少ないといえは少ないが。

ジャージ姿で手にはスポーツドリンクが入ったペットボトル。髪は邪魔になるのか、後ろで纏めている。

薬袋みない柚ゆず溜なみだ。

家に帰りたくないからと正直に言うのも恥ずかしいのでとっさに僕は嘘を試してみた。

「空を眺めてたのさ」

いかにも嘘らしい自分で言っただけで虚しくなる嘘だった。

「へー。そーなんだー」

どうしてもよさそうな声で柚瑠は答える。

「そういう柚瑠は？　これから部活？」

「そだよ。大会が近いからって部長が張り切っちゃってさー。あ、今は今休憩中なの。そいでこれからまた練習。あたしってば。期待のホープだから」

柚瑠は胸を張りえらく自慢するように言った。彼女は陸上部で一年生ながら大会に入賞し、来年は陸上の部長を任せられるとさえ言われている逸材だ。

「そいじゃ、バイビー」

「うん。それじゃ」

柚瑠はグラウンドへ走っていた。

葉袋柚瑠と僕の間を簡潔に言うならば、同じクラスで別に親しいって訳でもないけど席がたまたま近くだったこともあって話しをするようになった関係とでも表せばいいのかな。

彼女は性格が明るくて、とても美人な女の子だ。活発で誰にでも優しいし、僕みたいな人間にも隔たりなく接してくれるのは正直ありがたい。僕は柚瑠以外に友達と呼べる人がいないのだ（柚瑠からそう呼べるかは甚だ疑問ではある）。その原因はきっと僕個人にあるのかもしれないし、周りの環境のせいかもしれない。とにかくそういう意味で柚瑠は僕を救ってくれる唯一の人間だった。

僕は少し古くなった運動靴の紐をしつかりと締めなおし、億劫になるほど日差しの強い外にとび出した。

校門を出て歩くこと十五分。学校から遠ざかるに従って徐々に傍目から見ても田舎率が増加しているのは言うまでもなく、僕の家付近にあるため毎日利用している商店街も半数以上がシャッターを閉めており、静寂さを醸し出している。客も疎^{まば}らだ。

ただ。

僕があの手に通うことになりこの近くに家を借りてから、初めて買った半年前とは異なる光景が今では日常茶飯事となっている。

重厚な装備で身を固めた数人の警察官が列を成して商店街を横ぎる。この街が、いや世界がこんな光景になってしまったのは三ヶ月ほど前のある出来事のせいだろう。

僕の脳裏にその映像が鮮明に浮かび上がる。

『この世界は狂乱している。過ちを犯している』

その通りだと思った。

『私はこの世界を完膚なきまでに壊す。現在の腐敗した世界を無慈悲なまでに消滅させる』

不謹慎にも僕はテレビ越しの宣誓者を応援したくなった。でも無理だと思った。だって世界はこんなにも残酷で恐ろしいんだから。でも……

全世界同時に予告なく強制的に放送されたあの映像は全世界を驚愕させると同時にテロリストとも取れる発現に世界政府は警戒を強め、各自治政府もテロリストを捕らえるために警備を強化していた。だけどあの映像を見た世界政府の反応はパフォーマンスじみていたと言うか、表面上言うこととやることはしたという感じだ。何も

しなくても勝手にテロリストは捕まるとでも思ったのかもしれない。それからテロリストと呼ばれた宣誓者は世界政府を嘲るかのようになり、破壊者になった。政府の管轄下にある情報司令部が爆破されたのだ。死傷者はなかったものの、警備が厳重で有名なため政府も爆発され、とは思っていなかったのだらう。世界政府は事態を重く受け止め、テロリスト確保のために本腰を入れ始めたのだ。

それで、街には重装備の警察官が徘徊するようになったのだ。こんな田舎町でさえこれでは、都心部の凄さは異常と言ってもいい。

簡潔に纏めればそんな感じ。

警察官の威嚇的な態度にすっかり萎縮してしまう。

それに警察官を見ると特に何かしたわけじゃないのに、後ろめたい気分になる。やばいですぜ兄貴、的な。なぜだろう。いや本当は分かっているのかもしれない。

閑話休題。

商店街の中ほどで横道に曲がり裏道に入る。この辺りはストレンジャーが入り込むと帰って来られないと評判の地域かどうかはさておき、僕の住処もこの辺りにある。何度も狭く入り組んだ道を曲がりたどり着く。

オンボロではあるが歴史を感じさせる築百年ほどの古家。すこし強い地震が発生すればたちまちあっけなく崩壊してしまいそうな家。簡単に侵入できそうな家のつくりであつても泥棒さえ寄り付かない家。

すなわち。僕の家であつた。

借りている状態だから、僕の家だとは一概に言えないけど、何にせよ早くここから引っ越したいと引っ越した当日から常々思っている。

配達物が無いかを確認してから、蹴り一発で粉々に粉碎してしま
いそうな扉に向かう。心もとない扉のこれまた信用ならない鍵を取
り出し開錠しようとするが、どうにも様子がおかしい。

自分の家から声がするのだ。しかも爆笑の。

……一つだけ心当たりがあった。せつかく屋上で時間を潰してま
でアレと接触しないようにしたのになぜここにいるのだろうか。い
やもしかしたら、何かの気の迷いで侵入してしまった泥棒かもしれ
ない。それで爆笑してしまうような事態に陥っているだけかもしれ
ない。うん、そうだ。そうに違いない。

覚悟を決め、扉を開ける。

軋む音を立てながら扉はゆっくりと開かれ、僕と侵入者の対面を
許可する。

残念なことに、真に遺憾なことにそれは泥棒でもなく、見知らぬ
人間でもなく、葉袋柚瑠でもなく、テロリストでもなくて。

僕は靴を脱ぎその人の元に向かう。玄関から一メートルに満たな
い廊下を抜ければ、すぐに寝室と居間を兼用とした部屋にたどり着
く。

「どうしたんですか、管理人さん？ この時間はこっちにはいない
でしょう」

管理人さんはこちらに気づいたものの、振り返ることなくテレビ
を見ながら言った。

「今帰るか。生憎うちの五十型プラズマテレビを修理に出してい
て、そこで仕方がなくお前のオンボロ部屋のオンボロテレビで我慢
していると言うわけだ」

随分な罵倒ぶりだがこれはいつものことなので、こちらが大人に

なることで対処。もしくは諦める。管理人さんは迷惑と言う単語の意味が未知なのかもしれない。懇切丁寧に指導してもいいんだけど、どうせ僕の言うことなんか聞きやしない。彼女は心が狭量なのだろう。

「ん？　今私のことを考えていただろう。こう見えても読心術の講座を受けていてな」

不敵に笑い、自慢げにこう言った。

「私の山よりも高く、谷よりも深いの懷に感動していたろう。いや、なにほめたからといって何もやらんがね」

……哑然とするばかりです。

「読心術っていつの間に習得したんですか？」

「いやいや、〇ーキャンでな」

「ありましたっけ、そんな講座？」

「これからはただの管理人ではなく『心の管理人さん』と呼んでもいいぞ。心を込めてな」

それはプライバシーを疎んじるというか、権利も何もあったもんじゃなかった。

「それより、郵便受けに夕刊着てませんでした？」

ん？　と何か思い出す仕草をする管理人さん。

「ああ、このことか。もう読んだからな、返すぞ」

それは僕が真っ先に読むはずの新聞だった。一面には連日テロリストの情報ばかりだ。

それから付け加えるように。

「あと、お前に手紙が来てた」

投げ捨てるように投擲した手紙は、計算されたかのように僕の足元に飛び込んでくる。それを拾い差出人を確認する。

それはいつもの変わることのない送り主だった。僕は嘆息して自身を確認する。数行の無機質な言葉の羅列。

一度内容を脳内で咀嚼し、一字一句正確に暗記する。
それから手紙をクシャクシャに丸め、部屋の隅に鎮座している円柱形のゴミ箱に投げ込んだ。若干予見した軌道とは異なる方向をとってしまった為、ゴミ箱の淵に当り床に落ちる。

「私も読んでもいいか？」

と、管理人さんが既に読んでいなかったことと、許可を求めたことに驚きつつ、了承する。

「あ、はい。どうぞ」

そうか、と満足気に相槌を打ち、丸めた手紙を広げ読み始める。

「ふーん。これはまた愉快な。一体どうしてお前に来たのかな。とやかく言うつもりはないが、せいぜい貢献してくれよ」

ご機嫌取り。

管理人さんは最後にそう付け加えた。

別に否定するつもりはない……けど肯定はしない。
してなんかやらない。

管理人さんが手紙を捨てるのを視界の端に収めてから、僕は外出するため玄関に向かった。

スリッパを雑に脱ぎ捨て、靴に履き替え、ダークブルーの少し大きめのパーカーを着てドアを開ける。

「ごゆっくりどうぞ」

テレビに見入っている背中に感情を込めずそう言った。

扉は軋みながら二人を断絶する。

A s i d e 1 — 2 (前書き)

こんなものを書いた自分が怖い。悪い意味で。

A s i d e 1 — 2

不都合なことに僕の家周辺には交通機関というものが存在せず、最寄のバス停まで歩くということは、すなわち僕が通う学校の目の前まで行くことと同義なのである。そんな訳で自転車を所持していない僕の移動手段は自ずと徒歩になる。

その学校を挟んで自宅とは反対方向にはやけに大きな駅があり、まるで学校から『こちら側』と『あちら側』で何があったと、この周辺の土地計画に携わった責任者に問いたいほど経済的格差が大きいと思う。もちろん僕の住む『こちら側』が劣等である（それでも学校周辺はまだマシな方で、僕の家周辺があまりにも何もなさ過ぎる）。

その駅付近に行くまでに学校からさらに二十分程度の時間を所要するが、多種多様な店舗が連なっている為、商店街だけでは入手困難な品を購入するのに週に一度はこちらに来るようにしている。

ついでに知り合いの店にも寄ろうかと思っている。

今日、こちらに来た主目的は単純に管理人さんと同空間内で呼吸したくなかったとか、そういうことじゃなくて、遁走でもなく、たまには外食しようと思っただけである。一人暮らしをしているためか、ある程度の調理能力は有しているけど特別好きという訳じゃないので、こうしてサボりたくなる時だってあるのだ。

ただし現在時刻は五時過ぎ。食事と洒落込むには存外に早すぎる。歳を取ればこういう生活になるんだろうけど、十代のうちからここまで規則正しく生活したくない。原因たる原因はやっぱり管理人さんにあるわけで。でもこれ認めちゃうと、管理人さんと居たくない

から早めに出てきたと思われて癪だし。

一体誰に思われるのかさえ検討つかないまま、僕は歩き出した。たまにはのんびり散歩もいいだろう。そんなことを考えて一人悠々と街中を闊歩するのであった。

駅前のショッピングモール。軒を連ねる店舗の数々。混み合っているファーストフードショップ。急ぎ行く雑踏。夕暮れの町並み。破綻した一人ぼっちの道化。

やがて日が完全に沈み、駅方面に歩を進める人も増えていく中、僕はどこで食事しようかと考えていた。普段はその場の気分で決めていることも多かったため、手持ちの少ない今日は注意しなければならぬ。誤って高級レストランにでも入ってしまったら水以外注文できなくなってしまうだろう。

結局の所、よく通っている馴染みの店に行くことに落ち着いた。人と話すのを不得手としている僕でもあの店では平気なのは、マスターが気さくでいい人だからかもしれない。

人の多い大通りから少し外れた場所にポツリと佇む古風な店。その筋では有名な焼き鳥専門店だ。木製の二重構造になった扉を開け中に入る。

「いらっしやいませ」

活気のある店員達の声がカウンターより聞こえた。

店の四分の一を占めるカウンター内の右側????入り口側にある焼き台の正面に立つ、六十を過ぎたとは思えない若々さで調理作業をしていたマスターもこちらに気がつき、覇気ある声をかけてくる。

「毎度様」

僕はそれに会釈で返しいつもの指定席に向かう。店にはテーブルが三箇所、カウンター席が八席あり最大で二十人ほどが座れるようになっていいる。僕がいつも座るのはカウンター席の焼き台の目の前。つまりマスターと向かい合う場所が指定席だ。

今日が給料日前だからかもしれないが、客が少なく空席が目立った。混雑しているのは苦手なので都合が良かった。

席に座った所でタイミングよく、適度に温められたおしぼりを出される。

僕はメニュー表をめくり、飲み物といつも頼んでいる定番のものと、ここには載っていないオリジナル商品を注文した。

「味付けと焼き加減はいつも通りで？」

「ええ。いつも通りで」

何となく常連の優越を誇っている僕である。特に意味なんか介在しないけど。

入れ替わるかのように飲み物が運ばれる。烏龍茶だ。

グラスを傾け、液体を嚙下する。

今後のことを考えるともしかしいとも表しがたいおかしな気分になってくる。もう一口。奥歯に少ししみた。

それからすぐに焼き鳥の乗った皿がテーブルの上に並べられる。それらをゆっくりと食べながら、マスターと世界情勢やら経済事情やらの話で盛り上がることも十分。

ガラッ、と音がしてお客が来たことを店内に知らせる。

「いらっしやいませ」

横目でチラリと様子を窺うと、意想外にも入り口に菓袋柚瑠と他

みないゆずる

数名と人間が立っていた。

「あれ、黒坂明夢？」
くろさかあきむ

どうして声をかけちゃうかなこの人は。知らない振りをしてくれれば良かったのに。柚瑠はそんな器用なことが出来そうにもないからしょうがないけど。というかフルネームは止めて欲しい。せめてどちらかに統一を。

しかしすごい偶然だ。高校生が入るといふ感じの店には思えないんだけどな。僕も高校生ではあるんだけどさ。ある種僕は達観している様な気もするし。

柚瑠はテーブル席が空いている中、なぜか僕の隣の椅子を引き、あろうことかそこに座った。

陸上部の同輩とおぼしき人たちも、マジですか、そこ行っちゃう？　みたいな苦い顔をしていた。気がつかないのは座った当人だけ。渋々、その隣に掛けていく陸上部メンバー達。中には話したことはないもの同じクラスメートと思しき人間もいた。

「イヤーすごい偶然だね。さっき部活が終わってさ、お腹減ったから皆で何か食べようってことになってここに来ただけど、驚いたねー」

必要最低限の言葉で返答しつつ、急いで食事を終えた僕は、何を注文しようかと迷っていた柚瑠とその他を放置し、マスターにお金を丁度支払い店の外に出ようとした。柚瑠がそれに気がつき、何か言いかけたが、その前に扉を閉め、音を強制終了。

これで終わり、と思ったんだけど、柚瑠が何のためか店からとび出してきた僕の手を掴む。

「なに柚瑠？」

「そんなにダメなの？ 誰かと一緒なのは嫌い？ 誰とも関わりたくないの？」

彼女にしては珍しい強めの口調。

「何言ってるの。そんなつもりはないよ。ただ他の人たちが迷惑そうだったし丁度用事があったってだけで」

「そうやって他の人ばかり気にしてたら友達なんて出来っこないよ。そもそも君は自分から他の人と距離を取ろうとするじゃない」

僕と君は何もかも違うんだよ。一緒にするな。思わずそう叫んでしまいそうだったが、柚瑠の言うことも正論だ。しかし正論ゆえにどうしようもなく破綻し、整合ある論理を求めるがゆえに矛盾を抱えているのはあくまで彼女が常人の思考で通常の世界を生きてきたにこの上ない。

「友達が待ってるよ。僕と一緒にいると君まで在らぬ迷惑を被ることになるよ。だから」

もう僕とは関わるな。

「じゃ、急いでるから」

踵を返し、さらに闇色の深まる路地に走った。

明日柚瑠に会った時どんな顔をすればいいのかわからなかった。

謝ればいいのか、もう僕とは関わらないように拒絶すればいいのか。いっそのこと、学校にも行きたくなってきた。

そんな風にずっと考えていたからだろうか。

ほとんど街灯もない路地の曲がり角で人と衝突してしまった。さほど衝撃もないため倒れることはない。

「いて。す、すみません」

目の前で尻餅をついた人物は顔もスッポリと隠してしまうほどの外套で身を包みこんでいた。その人物はコンクリート壁に手を掛け立ち上がろうとするが、呻き声をあげ、力が抜けたのか再び倒れてしまう。ぶつかった時に怪我をさせてしまったのだろうかとか心配して、僕はその人物を注視した。すると、薄暗くて先ほどまでは分らなかったが、外套に染みのようなものが付着していた。足の位置だ。気のせいかな鉄くさい匂いがする。

間違いない。これは……血液だ。

尻餅をついた以上、あの位置からは血が出ない。なら、元々怪我を負っていたことになる。

じゃあどこで？ 訊くべきだろうか。

本能的に、あるいは経験則から警鐘が鳴っていた。

かかわるなかかわるなかかわるな。

関わるな、係わるな、拘わるな。

カカワ／ルナ／。

……／カカワレ／。

瞬間。思考回帰。

とにかく救急車を呼んだほうがいいかもしれない。

携帯電話を取り出そうとしたとき、外套の人物が来た方向から多くの足音と怒号が聞こえた。

「いたぞ。あそこだ。逃がすな、追え」

何がどうなっているのか。一瞬僕を捕らえにきたのかとわけの分からぬ被害妄想癖を発揮したが、外套の人物が慌てて立ち上がり逃げようとするのを見てほっとする。……いやいやダメだろ。

慌てて立ち上がったためか、外套のフードから顔があらわになる。ショートヘアの女の子だった。

険しい顔の少女は今にも倒れてもおかしくないほど動きが弱々しかった。それでもまだ何かを諦めきれない顔。

……重なる。類似じゃない。同一だ。

どうするべきか。やばい雰囲気だ。

思考とは裏腹に体が勝手に動いた。少女の手を取り、走り出す。

「こっち」

後方からの声はもう聞こえない。少女は驚いたようにこちらを見つめながらも大人しく、ついてくる。この街一帯の地図は暗記している。少女を追っている集団に気を配りながら、とにかく走る。走りきる。

向かう先は知り合いの店。

A s i d e 1 — 3 (前書き)

ありえない急展開。わかりやすい複線の数々。

A s i d e 1 — 3

知り合いの店は、ここからある程度近くなおかつ、少女を匿うことができそうな場所だ。

途中傾斜の厳しい坂になっており、少女が辛そうにしているので肩を貸して登る。

会話はしなかった。そんな余裕はなかった。

坂を登りきると高級住宅街が広がっている。その一角。

豪華な邸宅ばかりが並ぶそのほんの隅っこでせせこましく建っている荒屋あばらやには入り口付近にこのように書かれていた。

『情報屋兼探偵事務所』

少女の様子を窺いながらも、入口の呼び鈴を鳴らし、返答を待たずに扉を開ける。普段だったらそんな無粋なことはしないけど、緊急事態だ。

「ここにいる人は、まあ信用は出来るから大丈夫。とりあえずここで怪我の具合を見ないと」

しかし先ほどの人たちは一体なんだったのか。いや、それを考えるのは後でいいだろう。

外とは違って意外としっかりした造りの店内（といっても数台のパソコンにでかいサーバー、大量のテーブルが大半を占めているので広くはない）は照明がついていないので薄暗いものの、パソコンのディスプレイからの薄明かりでその不機嫌そうな顔だけは窺えた。

「あのさ、呼び鈴を押しておきながらそれを待たずにズカズカと入

り込んでくるのは反則だと思うのだけれど。そのあまりにも堂々とした勇氣は評価してあげなくもないのだけれどね。まあ君が良質な情報をもたしてくれるということならばありがたいし許してあげないこともないと思うのだけれどいくらなんでも夜分遅くに女の子の家に許可なく入り込むのはいただけじゃないな。それとも君が常軌を逸した変態であるという証拠つきの情報を世間一般に公表して欲しいというならば僕としても前面協力でだね……」

「悪いが、今はお前の饒舌に付き合っている暇はない」

きなきなき
鬼無里南萌。

パソコンや機械関係に関してはこいつの右に出るものはいないだろう。その能力を持て余しながら、彼女は情報屋や探偵業をやっている。

日本人形みたいな大和撫子の彼女がパソコンを操作する姿は似合わないと思うのだが。そもそも南萌とまともに会話できるのは奇しくも友達なんて皆無に等しい僕だというのだから世の中不思議なものだ。類は友を呼んだのかはさておき。

「ん？ 誰だいその子は？」

今になって気がついたのか、南萌が興味深そうに僕の肩につかまっていた少女に目を向ける。

「とりあえずソファを貸りるよ」

少女をソファにゆっくりと寝かせ、足の様子を観察する。専門家でもなんでもないので痛そうだな、くらいの自分勝手な感想しか思いつかない。

少女は疲れからか、はたまた安堵からか、眠ってしまったように動かない。本当に眠ってしまったのかもしれない。

「それで、その子は一体何なのかな？」

正直言って、僕も彼女が何者なのか知らないの、とりあえずここに至った経緯を簡単に説明した。

「ふむ、随分と切迫した状況のようだね。面白そうだね」

一言多い。

南萌は十字の記号が入った箱から消毒液やら包帯やらを取り出してきばきと処置していく

「それと、その追跡者達と仮称しておくが、彼らの服装はどんなものだったか分かるかい？ 他にも人数や歩き方とか情報があるなら教えてくれたまえ」

たしか、はつきりと見た訳ではないが服装は黒のスーツで、人数は少なくとも四、五人程度いたと思う。歩き方は音がほとんどしなかったのと、軍人のそれに近い気がした。

そういえばここに来るまでの間誰にも会わなかった。そこまで遅い時刻ではないはずだが。

「とするとだ。規制できる能力を持っているから追跡者達はどこかの権力者の駄犬か。正式かどうかは判断がつかないな。ましてやサイレンサー付きであったとしても街中で発砲する始末。やはり間違いない」

「何か分かったのか？」

「君も随分と悠長に身構えているじゃないか。僕でなくても多くの人が気づくことができる重要なことがあるじゃないか。……まあいいけどね」

南萌は呆れたように笑う。その上品な笑い方は育ちの良さを窺わせた。

「しかし、君のその無駄に満ち溢れた才能には驚嘆するばかりだ。

畏敬の念さえ払ってしまうよ。こうも頻繁にトラブルに巻き込まれるその体質、いや性質といい直そう？？？非常に厄介極まりない代物ではあるが、面白いよ。実に面白い」

褒められているのか、貶されているのか全く分からなかった。

「褒めているのだよ。君と敵対するつもりははなから毛頭ないのでね。その点は安心してくれていい。ましてや君は……いやこれは言うべきではないな。君が一番分かっていることなのだから」

「それで、結局なにが分かったんだ？」

「そうだね。馬鹿らしくも明瞭で簡潔な言葉を用いるならば、彼女は『世界の敵』とでも言うべきかな。そんなくだらないものは立場や時代でいくらかでも異なってしまうのだろうが、ここでは敢えて世論の大多数意見に従ってそういう表現をするのが妥当だろう。これは君にも少なからず共通するところがあるのではないかと、僕は思っているのだが。おや、よく分からないといった顔だね。それはまた今度として。彼女の正体だが彼女の顔をもう一度見てごらん？本当に見たことがないかい？」

彼女の言っていることは全く分からなかったものの、とりあえず従い少女の顔を初めてじっくりと見入る。

……………！

髪型が短くなっていたのも相俟って、気がつくのに遅れてしまったが、やっと今、僕は彼女の正体に気がついた。

「分かったみたいだね。詳しい話は本人から聞きたいのだけれど。

……いいかな？」

南萌は僕に向かってではなく、ソファーに声を掛けた。

やがてソファーで眠っていたはずの少女は起き上がりこちらをしつかりと見据え一言。

「気がついてたのだな」

「いやいや、言ってみただけだよ。本当に眠っていても問題はないしね。怪我はどうか？ 応急処置をこの僕にさせた以上、死ぬことは許されないよ」

すごい傲慢な物言いではあったが、鬼無里南萌だからこそ許される、そんな雰囲気があった。

少女が感謝しようとするのを南萌は手を突き出し制す。

「感謝するならば黒坂明夢という変人にしておくといい。君をここまで連れてきたそこにいる男のことだ」

少女が南萌から僕のほうへ顔を向ける

「危険な所を助けていただき誠に感謝する。紹介が遅れたが、私は「知ってるよ。確か『ほのか灰火』って名前だよ。本名かどうかは分からないけれど」

間違いなく偽名だとは思うのだが、本当にその名前が本名だとしたら驚きではある。

「ふむ、そうか。私の名前の知名度も高くなったものだ。広めたつもりはなかったのだが、こう突飛なものではいた仕方がないか」

僕は改めて確認をとる。

「それで灰火が本当にあの映像に出てた人なの？」

彼女は肯き言った。

「ああ。私が彼女の言う世界の敵だ。三ヶ月前、世界に向けて宣言した主張は今も何一つ変わることはない」

『私はこの世界を完膚なきまでに壊す。現在の腐敗した世界を無慈悲なまでに消滅させる』

「そっか。そうなんだ」

僕の言葉を聞いて怪訝な顔になる灰火。

「何を納得している？　そもそも君は私の正体を知らずに助けてしまっただけだ。ならばこれ以上義理を通す必要性が在する理由はないだろう」

自分の世界の敵なのだから、これ以上関わるな。そう言いたいのだろうか。

確かに僕と似ているのかも。

それでいて何もかもが遠い。とおすぎる。いや、距離という概念で表現不可能なほど決定的に違いすぎた。

それでも。

「……理由ならある」

僕は壁にもたれかかり半ば呟くように言った。思考がついてきていない。考える前に口先から出てしまっている。

「何だと？」

「理由ならあるんだ。三ヶ月前のあの映像が流れたとき、応援しなくなったんだ。死んでほしくもなかった」

これは本当だ。

「世界は恐ろしいから、だからもし止めるなら止めてほしい」

これは本当だ。

「もし、などという仮定条件はありえない。ましてや、私は世界の恐ろしさを十二分に理解している。」

その愚鈍さも、卑劣さも、傲慢さも、緩慢さも、凄惨さも、終焉さも、奇矯さも、懊悩さも、滑稽さも、軋轢さも、詭弁さも、奇傑さも、恐慌さもな」

「解……解ってるよ。だから、その世界を壊すというなら、その覚悟があるなら僕も仲間に入れてくれ」

これはほんとう？

「もう僕には居場所がない。希望もない。絶望しかない恐怖しかな

い」

これは本当だ。

「君の役に立ちたい。世界に対抗するというなら一人じゃ無理だ。仲間が必要だよ。僕を仲間に入れて欲しい」

これは……

南萌が愉快そうに笑った。

「また随分と大きく出たね。それは君が世界の敵、わかりやすく言えばテロリストになるということだけどいいのかい？」

「南萌。解っているだろ。遅かれ早かれこうなる可能性は高かった。どのみち選ばなきゃいけない。なら、道を選び進むしかない」

「そうかい。なら僕が言うことは何もないな。それで君は明夢をどうするのか。彼の言うとおりで仲間に入れるつもりなのかい？」

呆氣に取られていた仄火は、南萌の言葉で我にかえった。

「……あ、ああ。私には一蓮托生の仲間はいないが、それでも簡単にテロリストになれば、一般人に対して言えるはずがないだろう」

一般人か。

「それなら大丈夫だと思う」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味だよ。どうせそのうち解るって。だから仲間に入れて？」

仄火は考える素振りをし、やがて一つの条件を出した。

「ならば、世界屈指の人材を探し出し仲間に加えて欲しい」

やっぱり仲間は欲しかったみたいだ。

「私は戦闘能力が皆無の策士だからな。仲間が多くいることに越したことはない」

「うん、分かった」

交渉を終えた途端、南萌が声を上げる。

「おや、そんな簡単なことが条件で良いのかい？」

「早々見つかるものではないし簡単なことではないと思うのだが。それとも何か当てがあるのか？」

顔に微かな期待の顔を浮かべる仄火。

「当てかい。なくはないのだけれどわざわざそんなことをするよりももっと簡単な方法があるじゃないか。時間がかからず且つ現実的で絶対的に仲間が増える方法がね」

……まさか。いやいやそんな短絡的に決め付けるのは良くない。

でも世界に匹敵、いや超越するほどの人材を簡単な方法で仲間に引き入れる方法？？？それが当て嵌まるのはこれしかない。

「明夢は気がついたようだね。そう……」

相変わらず豊かな表情で彼女は言う。

「世界に匹敵できる逸材。僕がいるじゃないか！」

言い切った！ 言い切っちゃったよこの人！

「信用していない顔だね。ではどうするかなー。うん、じゃあ君に有益な情報を差し上げるとしよう。君を追っていた犬共だけど、もうとっくに引き上げたよ。方向的にはうまく偽装しているつもりかもしれないが世界政府の日本支部といったところか。あと、明夢の顔は向こうに知られちゃったみたいだから」

ついでに、とばかりに重要事項をあっけらかんと告白する情報屋。完全にテロリストと同じ扱いですかそうですか。というかいつの間に調べていたのか。

「なぜ分かったんだ？」

未だに疑問符で一杯な仄火は南萌に問い質す。

「信じるかどうかは君次第だ。だが僕は情報屋であると同時に探偵だ。知らないことなんてないのさ」

かつこよくポーズを決め、確固不動の所悪いが、結局なぜ分かったのかは謎のままだった。

迷宮入り。

信じるかどうかなんて、南萌は言っていたけど、間違いのない情報なのだろう。そう彼女は何でも知っている。そう、なんでもだ。

仄火は何やら納得したみたいで、首を縦に振り頷いている。

「では、明夢、南萌。私の為に力を貸して欲しい」

「もちろん」

「面白くなりそうだ」

「では明夢、早速仕事頼みたいのだからいいか？」

「うん。何の仕事？」

「今のメンバーでは世界を破壊するのには時間がかかるのだ」

時間はかかっても、目的は達成出来るんだ、と僕はその後の言葉も分らず感心していた。

「そこでこれから君には新たな仲間を搜索する任を与える。ああ、もちろん私も協力するぞ。南萌には情報収集に専念して欲しい」

「……………」

「……………」

結局は仲間になろうとなくなるとも、仲間探しをすることになるらしい。南萌も一杯食わされた顔をしている。

でも、どうせなら飛び切り最高のメンバーを連れてこよう。せめてそれが僕の役目だろうから。

これが僕らのチームの最初のメンバー達の出会であった。

B s i d e 1

零

この世界に歓喜した。
この世界に愛着した。
この世界に希望した。
この世界に安堵した。
この世界に執着した。
この世界に復活した。
この世界に感服した。
この世界に感謝した。
この世界に思考した。
この世界に計画した。
この世界に潜伏した。
この世界に偽×した。
この世界に××した。
この………。

／

その言の葉でこの世界は、反転した。盤面ごと根本からひっくり返った。構成要素を全て反転させ新たに世界を作りかえてしまった。

今までなかったはずのそれらはこんな身近な所に、対極にあるとも思っていたそれは、いとも容易くこちら側にも存在していることを理解してしまった。

理解するだけでなくそれは、幻想ではなく現実かもしれない、そう思い込むには十分な衝撃で衝動だった。曲解ではなく、現実に影響を及ぼす事実にして真実。虚数解でもなく、本当の正解。

ベクトルの向きは反転するにとどまらず、大きさが倍増した。それは単に二倍になったという意味ではなかった。

そう、それは。想像し創造するだけで、甘美なる誘いいざな

一

有志一同が全員初めて集合した会議が終了して、三十分ほど経過していた。未だ体は熱を持っていて、心臓の鼓動は緩まることがない。今なら何でも出来る錯覚さえあった。

現に僕らは不可能を実行しようとしている。

会議自体はこれからの具体的な予定や行動を、灰火ほのかが説明し、それぞれに役割分担をする程度で終了したため、スムーズに進行した。ほかの人は今頃、作業をしているかもしれないし、僕のように手持ち無沙汰かもしれない。

僕は、会議をした部屋の前のホールにいる。ホールは会議室よりもわずかに大きいが物が大したないのもあって、より広く感じられる。ホールにいるのは僕だけではない。

自称『世界最高峰の情報屋兼探偵』の鬼無里南萌きなしみなもがいた。彼女は僕より随分と早く部屋から出たはずだ。ということは僕が灰火を待っていたのだろうか。

南萌は相変わらず落ち着いた色合いで、かつ高級そうな（事実高

級なのだろう）和服を着てソファに座り、膝にはモバイルPCを乗せ、小さなキーボードに器用に何やら打ち込んでいる。南萌が担当することになった作業の一つ、新しい本部の建設場所を探しているのだろう。

今までホテルを転々としてきたが資金的な問題もあるし、なにより差出人不明の謎の手紙もあって、本格的に取り掛かることになったのだ。

思えば、南萌とは昔から何かと接点が多かった。別によく会っていたわけでもないけど、彼女の情報には何度助けられたか分からない。彼女はこうしてこの組織に入ったのだろう。経緯は分かる。僕も目の前にいたのだから。でもやっぱり分からない。

『世界の敵、分かりやすく言えばテロリストになるということ』

南萌が自ら言ったことだ。彼女ほどの技術を持っているなら、引く手は数多に存在するだろう。灰火のようにこの世界に悲観してたのだろうか。

それは、ないと思う。言いきれはしないけど、悲観はしていないかっただと思う。ましてや絶望してなんていないだろうし、でも希望は持っていなかっただろう。

南萌が味方をする理由が分からない。もちろん敵とかそういうことでもないと思うけど、中立でもないし、何なんだろう。わからない。

そういえば、灰火はどうして世界の敵になったのだろう。分かりやすく言えばテロリスト。僕に理由があるように、きっと灰火にもそれ相応の理由と覚悟があるのだろう。それは僕から聞くようなこ

とではないだろう。

ソファ―に座っている南萌が、手の動きはそのままにこちらに顔を向けてきた。

「どうだったんだい？」

「どうだったって何が？」

僕は少しとぼけてみる。

「話し合いだよ。この世で最も合理的で建設的で、秩序があって、血が流れない戦争だよ」

対話は決して高等というわけではない。言葉一つで国が減ぶことだったある。無論、そこまで極端な話し合いが行われたわけでも何でもないが。

「それでどうなったんだい？」

「とりあえず手を取り合うって感じかな。妥協とも違うけど、最低限の協力ってところかな」

僕がそう言うと、南萌はホッとしたようで、どこか呆れたかのような笑みを浮べた。それでいてやはり上品であるのはある種の反則技だと思う。

「まったく君はいつもそうだ。スタートが遅いというか加速が遅いというか昔の学校の時だってそうだ。初めて会ったときあれは確かに入学式のときだったかな？ 同じくらいの子供がいるからどんなものかと好奇心あふれて見に行ったら、あほみたいな顔をしていたものだったから見下していたら気がついたときには君は僕の手の届かないところに到達していた。そこからはひたすら情報戦だったよ。君の元にたどりつくまでかなりの時間が掛かったが今ではこうして同志として一緒に行動している」

聞き捨てならない言葉が紛れている。あほみたいな顔って。どさくさに紛れて何言ってるんだか。

そもそも僕は南萌と同じ学校だったことはさすがに覚えているが、まともに会話したことなんてないはずだ。そんなに印象に残る子供でもなかったはずなんだけどな、僕は。そんな余裕があったわけでもないし。

「別に僕は同志ってわけでも。利害の一致というか、なんというか」「何はともあれ、明夢が判断してくれて嬉しいよ。僕は君の目的を少なからず知っているからね。片手間にはなると思うが協力するよ」

「うん、ありがとう」

「何事も見返りを求めるのはよくないとは思うのだけれど、少し相談に乗ってくれないか？」

南萌が僕に相談とは珍しい。

「もちろん」

「助かるよ。今やっているのは、本部の建設場所だね、いくつか候補地はあるのだがどうにも光るものがなくてね、明夢はどこか建設場所に推薦したい場所はあるかな」

南萌はモバイルPCのディスプレイをこちらに向ける。画面にはいくつかの候補地と詳細な情報が映し出されていた。日本だけでなくアジア、欧州、欧米、南米とさまざまだ。まさか海外まで調べているとは。きっとパスポートなしの密入国になるのか、あるいは偽造パスポートやらで行くのか。でも顔は手配されているのか。だったら後で『勇神』^{ゆうしん}さんにでも変装の技術でも教わろうか。

とりあえず僕は、画面から情報を拾い、考える。

「なるほど。なんかパツとしないね」

「そうだろう。出来れば急げとのお達しだから、数は限られているのでね。しかし安全面を考慮するとやはりこの辺りがいいところだよ」

画面の中央アジアを指差す南萌。

「うーん。僕としてはひとまず日本がいいんだけど」

「気持ちは分からなくもないけど。この国はほかに比べて警戒網と情報技術が発達しているからね。別に勝てないわけじゃないけど、ほかを探したほうがいいと思う」

「警戒網は『一』^{はじまる}さんがいれば問題ないだろうし、情報面なら南萌で対抗できる。物理的障壁は無敵の集団がいるし、トラップとかに關してはあの子達がいれば大丈夫。だったら日本の、それも中枢近くだろうと問題ないはずだよ。それこそ監視も出来る」

「一理あるけど、僕の独断ではなんとも言えないね。それに大規模な工事が行われるなら怪しまれる」

「ならすでに出来ているものはどうだ」

「早々都合よくないし、僕らのニーズとは異なる形態だろう。不動産は上とのつながりだってあるからね」

僕は南萌からモバイルPCを借り、インターネットに接続する。いくつかの単語を打ち込み検索する。数万件ヒット。適当に一つ、サイトを開いて南萌に見えるように向ける。

「ん、これは、ドームの改修工事かい？ ああ、オリンピックのだね。それに付近一帯の大規模な工事か。渋滞緩和のため新たにトンネルも造るのか。なるほど」

「これにタイミングを合わせて、事前を買っておいた土地の地下に秘密裏に本部を建設する。問題は山済みだけといけそうじゃないか。地下空間をどこまで伸ばすか、場合によっては出入り口をいくつも

造らないと。監視システムとか配備したほうがいいか」

「そうだね。とりあえず僕は仄火にこの件を相談してみるよ。君はほかのメンバーにこの案件をどう思うか聞いてみてくれ。花蘭からんに訊いてみるのもいいんじゃないかな。何かみえるかも」

A s i d e 2 — 1

鬼無里南萌きなみみなもは完全無欠の情報屋である同時に探偵でもある。

属性の異なり、相反するこの二つの仕事ひまつぎしを南萌はなぜしているのかは分からないけれど。まあそれだけの能力があるという事だけは間違いない。

確かにフィクションで探偵や刑事といった職種には非合法で優秀な情報屋が付き物であるが、南萌は両方を一人でこなすほど変わり者である。

最近は何屋に引きこもってパソコンばかり操作していると思ったら、急に外に調べ物に出たりする生活を繰り返している。

仕事を分担しないのに、妥協しない性格なので当然忙しく、ほとんど眠っていないようである。

南萌の話では、僕は既に灰火ほのかを追っていた人たちに顔がバレてしまっている（どこまでの情報が知られているのかは分からないけど）、外出時には変装が必須となっている。

灰火は引きこもりなので変装するかは知らないが。南萌はまったくバレていないので、そのまま（和服姿で）外出するので、かえって目立っていないのか僕が心配しているわけだ。

現在の僕は、ニット帽と伊達眼鏡を装着している。一応変装だ。やりすぎると不自然らしいのでこの程度にとどめておいたのだ。そう考えると変装が得意な能力って意外と便利だよな。そんな人は現実にはいないだろうけど。

そうそう、一応テロリストにドラフト二位指名の僕が、なぜ外出しているかというと、仄火に買い物を頼まれたからだ。

僕の仕事は雑用ではないのだけれど、かといって他にすることがあるわけでもないの、今はそんなことばかりしている。

外食も出来ないし、ルームサービスは高いので、弁当を買ったりもしていたのだけど、二人が「飽きた」と言い出すので結局僕が作るようになってしまった。

メンバーは三人いるわけだが、仄火はこれからのことを考え、南萌は仲間集めの情報探して忙しく、空いているのは僕しかない。手伝うなんて大言壮語をしておいて、使い物にならないのは辛いのだ。元々大したすることも無いのだし。

こうして食担当、という決まりがいつの間にかできてしまった。

僕らの生活スペース兼悪事企み場であるホテルのすぐ目の前にあるコンビニには人がほとんどおらず、アルバイトであろうコンビニ店員の男性も暇でラッキーなんて思っているのだろうが、顔に出すことなく淡々としていた。

かごには2?のコーラ、お菓子、生活用品、コーラ、食材、コーラ、コーラ……コーラが満杯まで入っている。この大量のコーラは僕ではなく全て仄火が飲むものだ。異常といえるほどコーラに陶酔している彼女は一日でも黒の炭酸液を摂取し損なうと、すごいことになるそうだ。確認したい気もするけど、間違いなく僕に実害を及ぼしそうなので、保留にしておく。

レジにて少し待って、料金を支払う。

うわ、金額の八割はコーラだよ。レジの人「この人コーラどれ

だけ飲むんだよ」的オーラを発していたので（被害妄想あり）足早に店を出て、ホテルに戻ることにする。

当たり前の話だが、仄火の支援者とか、協力者とか、「救世主様」とか言っているホテルではなく、極めて普通の（健全な）ホテルなのでテロリストであるがお金を払わなければならない。別に踏み倒そうとか、逆に巻き上げるとか考えているわけじゃないけど、僕らは別に金持ちではない。

仄火はパトロンも探しているみたいだけど、テロリストに協力する人がいるとは思えないし（いたとしても怪しいけれど）、そういう人を探すのは危ない賭けにも等しいので無理だろう。いざとなれば、いくらでも稼ぐ手というのはあるものだ。

高級でも低級でもないエントランスホールを歩き、エレベーターに乗る。行き先は十二階。ホテルのほぼ真ん中に位置する階層だ。

止まることなく十二階にたどり着き、落ち着いた雰囲気のある廊下をまっすぐに進む。突き当りを右に曲がってすぐの部屋。ここが僕らの仮住まいだ。

住まいといえば、僕の家はどうなったのだろうか。お金とかもいくらか置きっぱなしだし、どうしようか。一度帰ったほうがいいだろうか。いや、ここからは距離もあるし、たいした思い入れもないからどうでもいいか。

管理人さんはどう思うだろう。いやどうも思わないか。どっちにしろ。

扉を開錠して、中に入る。

ホテルというよりは、完全に居住スペースをコンセプトに造られており、リビング、ダイニング、キッチン、他に八畳ほどの部屋が二つある。バスルームとトイレも別々だ。

八畳の部屋は入り口から見て左側が南萌の部屋で、ほかでかいサ―バーやパソコンが何台もおいてある。

右側が、仄火が精神集中するための部屋だ。

つまり僕には部屋が与えられておらず、寝る場所もリビングのソファ―かその辺の床しかない。仄火の部屋にはベッドが二つ用意されているのだけれど、さすがにそこで寝るのは気が引けるといっく、色々まずいでしょう。

リビングに行くと、仄火が「待っていました」と言わんばかりの形相で迎えてくれた。この場合は待っていたのは僕ではなく。

「はい、コーラ買ってきたよ」

「まったく、遅かったな。待ちくたびれたぞ」

そんな嬉しそうに言わなくても。顔がにやけている。

「重かったからさ、冷蔵庫に入れる？」

「一本は今飲むから抜いてくれ。それ以外は入るはずだから頼む。

ああ、ついでにコップも取ってくれ」

下手すれば破れかねない状態の袋からコーラを一本取り出しテ―ブルに置く。買ってきたばかりなので一応冷えてはいるが、氷も用意したほうがいいだろう。

袋も持ち直し、キッチンに向かう。途中、南萌に部屋から機械の稼働音が聞こえたが、扉に備え付けられたボードに外出中と書かれ

ていたので、まだ帰ってきてないのかと心配してしまう。

南萌はもうしばらく帰ってこないかも、と思いつつ冷蔵庫にコーラを収納していく。次はグラスだ。棚から備えつきのグラスを取り出し、氷を半分ほどまで入れ、リビングに戻る。

ペットボトルのフタを開けてすでに待っていた灰火は、僕からグラスを受け取るとすぐにコーラを注ぎ、一気に口に流し込んだ。

豪快な飲み方だ。風呂上りの牛乳よろしく女の子の飲み方とは思えなかった。

灰火は驚きの速さでペットボトル内を空気で満たしていく。

僕が凝視していたからだろう。灰火はテーブルを挟んで反対側に座る僕にこう言った。

「なんだ明夢^{あきむ}、君も飲みたいのか。コップはそういえば君の分がなかったな……ほら、特別だからな」

渋々といった感じでまだ中身の入ったコップを僕に差し出した。

さて、状況整理だ。

僕と灰火はテーブルを挟んで向かい合って座っている。オーケイ、問題ない。テーブルの上には残り三割ほどのコーラのペットボトルだ。まったく問題ない。ここには誰がいて誰がいない？ 僕と灰火がいて、南萌がいない。いいだろう。灰火がこちらに差し出したのは何だ。コーラの入ったグラスだ。いやそうではない。そうではあるがそれだけじゃない。間違っではないが真実かといえば戸惑う。情報が足りない。感情が情報化されていない。グラスは……一つだ。僕のはないし、南萌のは彼女の部屋だろう。これは灰火のグラスだ。ホテルの備え付けではあったが、今は灰火のだ。そのグラスは……

コーラが入っている。

言い換えよう。

そのグラスに入っているコーラは灰火の飲みかけで、グラスは何度も灰火が使用していた。
つまり。

……間接キスだー！

失礼、かなり壊れてました。修復は不可能だけど、微修正と誤魔化しは得意分野なので問題ない。顔にも出てないはず。

何も反応しなかった為か、灰火は不可能な視線を向けてくる。

脳内では処理能力を超えるほど反応しまくりだったのだが、まあいいとして。どうしよう？

取っ手があるグラスなら、どこに口をつけたか分かるんだけど。
いや、避けるためだからね。そんな変態チックな人間じゃないから。
それに灰火の「特別だからな」とは、特別にコーラを飲ませてやる
という意味合いであって、「特別に私が使ったグラスを使わせて、
あ・げ・る」(脳内妄想発動中)という意味ではないのだ。

この場における最良の選択は。

？ グラスを取り、素知らぬふりでコーラを飲む。

？ 流儀に反するので、ポリエチレン・テレフタレート樹脂製の瓶。
ようはペットボトルのほうを取り、飲む。

？ もう一つのコップを……ないんだった。却下。

？ 脳内フル回転で用事を強制喚起して、言い訳しどこかへ立ち去る。

解答。

「ガラナ派なので断固拒否」の別解？……では当然なく。

「いや、喉渴いてる訳じゃないから遠慮しておくよ」

どこまでも臆病な僕だった。

いや僕が一方的で押し付けがましく笑止千万な存在で周囲嘲笑ものの勘違い野郎なだけなんだろう。

「そうか」

僕の無駄な長考を一言で切り捨て、コーラを飲む仄火。

あーあ。

いや別に残念とかそういう訳ではなく。

……喉渴いたな。でも前言撤回するほどの勇気やふてぶてしさが微塵とたりともあるはずがないからな。ましてや冷蔵庫のコーラに手を出そうものなら……怒られるでは済まないだろうな。

仕方がないか。……仕方ないよな。

「あのさ、仄火。ちょっとその辺見えてきていいかな？ 勿論変装なら」

僕が言い切る前に仄火が遮る。

「女装だな。鬘^{かつら}あるぞ。服あるぞ。化粧もしていくがいい」
だから嫌だったのだ。

結局の所、自業自得とも言いますか、アホらしく。

仄火と南萌は何かと理由をつけては、僕に女装をさせたがる。その理由を聞くと、『事実を言えばお前はきつと女だ』『神の手違いとはこのことを言うのかな、いやむしろこれが狙いか。無神論者の僕が言うのもなんだけど』『お前は女装をするためだけに生まれてきたのだろうか』『しかしなぜ君はこうもそんな顔、つまりそれを童顔と言うのかい？ いや子供っぽいともまた違うからね、どうしたものか。とにかく女装をするべきかな』などと要領の得ない解答も含みつつ僕の存在理由を危ぶませるのであった。

先ほどは『女装させるなら買い物に行かないよ』と言って、徹底抗戦を試みたが（仮に南萌がいたなら僕はあっさり彼女達に降り、女装して買い物に生かされていたことだろう）、わざわざ外に水分を取るだけの為に女装をしなければいけないのはゴメンだ。全くどんな図式だよ。

「仄火落ち着いて。君らしくもない」

冷静沈着が代名詞の仄火のはずなのに、時々暴走することがある。こうなっては手がつけられない。

「済まない。取り乱してしまった。しかし、譲る訳にはいかんな」
「何でだよ！」

仄火が僕の腕を捕らえようとしてきたので、手を引いてかわす。
「ああ、そういえば南萌からの情報だが君は顔だけでなく名前すら世界に知られたようだ。公表されるのは時間の問題と見たほうがいいな。これで君は名実共にテロリストという訳……だ！」

この場という世界とは、仄火が敵対する機関『世界政府』のことだろう。この間、彼女を追跡していたのは政府の手下で間違いないか

ったようだ。そのときに僕の顔が見られたということらしい。テロリストの仲間入りは別にいいんだけど、それらしいこと全くしてないしな。一般人よりも非力って言っても過言ではないし。

声と共に、僕を女装させると言う謎の目的の為に仄火は襲い掛かってきた。

スライドするようにステップして再びかわす。

……一体僕らは何をやっているのでしょうか？

A s i d e 2 — 1 (後書き)

変態ばかり。

A s i d e 2 — 2

先ほどの件をグダグダと続けても仕方がないので結果だけ言ってしまう。

僕は女装をしていない。何とか逃げ切ることができたのだ。帰ったときに何を言われるか分かったものじゃないのでしばらく時間を潰さなければならぬ。

僕は通常の変装モードでホテル一階のロビーに足を延ばしていた。しかし、とりわけてすることも無いといえぬ。僕が戦力外通告により除け者にされているわけではなく、単に南萌や灰火みなもの情報待ちなだけである。

しかし現在、人材探しは難航しているようだ。灰火はあの通り、トコトン拘るので、自分の眼鏡に適わない中途半端なのは即切り捨てるし。南萌も南萌で検索条件が異常にハイエンドで、これは人間じゃないだろ、とツツコミを入れたが、含み笑いをされただけで条件を下方修正するつもり一切ないようだ。

なんか都合よく、賛同者が現れないものかね。エビで鯛どころか、鰯が釣れる感じで。

とりあえずホテルの売店で小さめのコーラを購入し（てしまい）、近くのベンチに腰を下ろす。

プルタブを開けると、プシュッと炭酸の抜ける音がする。

どうして炭酸は抜けるのだろうか。いや当たり前の話だが。誰でもいいから、何とかして欲しい。一度灰火が炭酸の抜けかけたコー

ラを飲み、理不尽な怒りを僕にぶつけてきたことがあったのだ。

「はあ。どうするかな。大変だ」

あまり大変とは思えない独白を試してみた。

「まあ。それはそれは大変でしたね」

「そうなんですよ。あいつら超絶我儘で、遠慮ないし。俺は奴隷じゃないっての」

コーラを一口。少しぬるいが、飲めなくもないそんな炭酸飲料。買ったばかりなのに。

「でも、それにしても楽しそうですけど」

僕は僅かにだけ間違はなく肯く。

「そりゃ今までに比べれば。昔の、偽りの平穏で耐えるか、綱渡りみたいに危険で安穩とは程遠いけど、もし渡りきることができたら本当の幸せが見えてくる可能性を秘めた途をとるか。

細くて今にも切れてしまいそうな綱^{みち}だけど、本当に続いているのか保障も確信もなく、絶望に繋がっている途をまっしぐらの最中かもしれないですけど、諦めたくないんです。失いたくないんです」

僕の隣にいつのまにか腰掛けていた女性は大人っぽく微笑んで言う。

「ふふっ。諦めなければ、か。きっと叶いますよ」

「絶望の渦中でもですか？」

不思議と自分の心中を吐露することができた。自分自身と向き合っている感覚があった。

「この世界は整合性を何よりも好んでいます。絶望の反対はよく希望だって言われますが、この二つは対極ではなくて、鏡のように表

裏一体となっているの。二つの本質は同じだから。だからきつと見えるはず。それに貴方がいる以上、貴方次第でどうにでもなるはずよ」

……………今更^{ひと}だけど。この女性誰だろう？

気がついたときには座っていたし。油断していたつもりはないんだけど、ボケーとしていたといえぱしていたから、なんともいえないが。僕のことを知っているかのような口振りだし、案外、仄火や南萌の知り合いかもしれないな。

「あの、」

どなたですか、と訊く前に言われる。

「貴方は運命を、予定調和を信じますか？」

なんか、宗教勧誘のようにも聞こえてしまうのは、僕が本当の意味での無神論者の無粋な思考だろうか。

それにしても『運命』『予定調和』ときたか。

僕ほどこれに敵対し仇なす、奴もいないだろう。

「その質問に答えるには、その言葉の定義を決めておかないと」

彼女はニツコリと天真爛漫な笑みを浮かべ考え込む所作をする。

僕よりも明らかに年上だが微笑ましいと思ってしまうのは僕が変態なのではなく彼女自身が作ることなく本当に素直な性格だからかもしれない。

とにかく今まで周りにはいなかった、可愛らしい仕種をする希少種であることは間違いだった。仄火や南萌はとにかく腹黒いような奴らだからな。

「そうですね。貴方はどう考えますか？」

いきなりこっちに振られても困りますが。答えられないわけじゃないけど。

「辞書的に言えば、運命は『人間の意志にかわりなく、身の上をめぐるて来る吉凶禍福。それをもたらす人間の力を超えた作用。人生は天の命によって支配されているという思想に基づく。めぐりあわせ。転じて将来のなりゆき』で。」

予定調和は『相互に無縁でのおの独立の世界をなす各モノド（殊に心身の両者）があたかも交互作用の関係にあるかのような状態を示すような理由は、あらかじめ神によって各モノド間に調和が生ずるように定められているからであるとするライブニッツの説』つて広辞苑にありますけどね。哲学ですが」

彼女は素直に驚き質問する。

「憶えているんですか？」

「ええ。嫌な言葉ですから。忘れられませんよ」

「じゃあ、貴方自身はどう思いますか。あると思いますか？」

「その存在は否定しませんよ。でも肯定はしたくないですね。肯定してしまったら僕が生きている意味なんかなくなってしまう。だからそれは曖昧模糊で五里霧中。どこにでもあってどこにでもない。理解できるようでまったく分からない。僕はそう考えています」

彼女は納得したと言わんばかりに頷き言う。

「やっぱり。想像通りの人ですね」

「僕のこと誰かから聞いたことあるんですか？」

「ええまあ」

煮え切らない返答でごまかす女性。

「そういえば自己紹介もしてませんでしたね」

彼女は左手を前に差し出しながら言う。

「轟花蘭です」

「どうして左手なんです？」

一般的に右利きが多い日本において、初見の人間同士の場合、握手をするならば専ら右手のほうが好ましいだろう。それをこの人は何の迷いもなく、左手を僕に向かって差し出した。

「でも、こっちのほうが良かったですよね？」

僕は迷いながら、左手で、握手し自己紹介することにした。断ることも出来ただろうがなんとなく、ただなんとなくだ。

「はじめまして。黒坂、明夢です」

「はじめまして、明夢さん」

手を離れた轟さんは、少し悪戯っぽい笑みを浮べて訊いた。

「明夢さんはわたしの職業なんだか分かります？ けっこう有名なんですよ」

これでいきなり、警察手帳とか、銃とか取り出されて、逮捕されるような展開はさすがにないとは思うけど、いや否定も出来ないんだけど。ここまで悠長に世間話をしておいてからの逮捕劇はないでしょう、うん。

「えっと、なんだろう。公務員とかですか？」

額の汗が重力に負けてツーと落下するのを感じつつ、微妙に踏み込んだ質問を試みる。

「違いますよ。でも一般的なお仕事じゃないかも」

前半の言葉で安堵の溜息。後半のフレーズで吃驚の息のみ。

警察じゃないけど、テロリストを追う組織の可能性はあったよな。しかし。馬鹿馬鹿しい。こんな人が悪い人なわけないじゃないか

（語弊あり）。こうやって前振りしていると、本当にそうだったり、何らかの伏線になってしまいうのでこのあたりでやめよう。

「なんだろう、分からないですね」

「じゃあ、正解を言います。正解は……占い師です」

内心でどこか安心しつつ、占い師という職業には馴染みのあるように、まったく接点のなかったと思った。朝の星座や血液型の占いしか見たこともないし、本格的なものにはお目に掛かったことがなかった。真偽が分からない、信じるものは救われる的世界なので僕は敬遠したい対象だったが、占い師そのものは（失礼な話だが）まったくもって常識人だった。普通です。

「まあ、私の場合、占うというよりは未来を視るだけなんですけどね」

……アレ？ この人見た目は大丈夫だったけど頭のほうがちょっと危ない。常識人からかけ離れていく轟さん。

「あれ、反応してくれないと、私が一人でブツブツ語る変な人みたいじゃないですか？」

十分アウトです。あるいは騙っているのだろうか。未来が視える、ねえ。さっきの運命はここにつながってくるわけか。

さすがに黙っているのは失礼だと思い、占いに関することを訊くことにした。

「いえいえそんなことはありませんよ。それより、もしよければ、僕を占ってもらえませんか」

テロリストとして死ぬような展開だけは避けたい。問題だったたくさん山積みだし。占いは信じない性質だが、何かアドバイスでももらえるかも知れない。多少の期待感も込めて頼んだが、返答は良

いでもなくダメでもなく意外なものだった。

「そうしたいのは山々なんですけど、さっきから何度も視ようとしてるんですけど、霧というか、靄みたいなノイズが掛かって読み取りにくいんですよ。それで先ほど、握手したときならどうかなって思っただんですけどやっぱり、ほとんどわかりませんでした」

「えっと、それは、今日は視えないってことですか？ 調子が悪いとか」

「いえ、そういうことじゃないですよ。例えば、あの今入り口から入ってきた人。スーツの男の人なんですが、あの人、十日後にお亡くなりになります」

轟さんは悲しそうに、冷めたように、言った。

「交通事故で即死です」

その言葉を確かめる方法は、十日後までないけど、僕は轟さんが嘘を言っているようには思えなかった。

僕は三十代半ば程度で健康そのものといった感じの男性を視界に入れながら、言う。

「あの、それを伝えたらその人を助けることが出来るんじゃないですか？」

「ええ。助けることは不可能ではありません」

「だったら……」

「彼を助けた場合、その対価として、本来死ぬ予定ではなかった人が数人、死んでしまいます」

僕は何も言えなかった。信じるとかそういう意味ではなく、ただただショックだった。目の前で死ぬと分かっているのに、助けることが出来ない。

「辛いんですね」

彼女は不思議そうな顔をした。

「そういつてくれる人は今までいなかったですね。それでも昔は、多くの人が救えるように努力したつもりなんです。いろいろと頑張っ
て、運命に逆らって、予定調和を乱したり。でも、ダメでした。ほとんどの場合、私のことを不気味に思っ
て相手にしてくれませんか。それで、本来よりも被害が拡大したこともあります。何やっ
てるんだろう私って。だから私は視ることしか出来なくなっ
て、それどころか、恐れるようになったんです。視ることを、望んでもいないのに視えてしまう力を」

「……………」

轟さんのこぶしがギュッと力強く握られていた。

「お願いがあるんです」

僕は黙って頷いた。

**A
s
i
d
e
2
—
2
(後書き)**

宗教勧誘？

A s i d e 2 — 3

「つまりだ。貴女は本当に人間の未来が視える、ということでののだな。しかしながら、黒坂明夢くろさかあきむに関しては例外的に視ることが出来ない。つまりところ、我々は貴女の力をそのように解釈し認識しているのだな」

仄火ほのかの問いかけ、というよりは確認に、部屋の中央にあるソファに座っている彼女——轟花蘭とどろきからんは頷いた。

「ええ。それで問題はないかと思います」

現在、僕らが仮住まいとしているホテルの一室に轟さんが来ている。無論、僕が連れてきたのだ。

彼女をお願い。

『あなた達の組織に入れてもらえませんか』

轟さんがどのような思惑を持ってここに来たのかは分からない。

彼女が何かから逃避するために。

あるいは、立ち向かうために、僕らのところに来たのかは分からない。

それでも彼女は、未来が視える、視えてしまう力に逆らうために立ち上がったのだろう。僕はそう確信している。だからこそ彼女を、仄火の元へ連れて行ったのだ。

僕は彼女と似ている。

黒坂明夢と轟花蘭は似ている。同じでも同類でもないけれど、指向性というかベクトルが等価だ。絶望的な状況に、屈服できずに、立ち上がり、僅かな可能性に、思い馳せる。

彼女は、全てを視てしまったが故に。

僕は、圧倒的な力を目の前にしてしまったが故に。

そして、中途半端な能力と可能性があったが故に、諦めきれないのだろう。

僕は彼女を助けなくなった。僕が、ではない。助けてほしい立場にある僕が、彼女を助けることなど出来ない。だから、組織の代表者に委ねた。

ソファアは向かい合うように二つ並び、部屋の奥側に、き 灰火と鬼無里南萌なみなも が座り、手前に轟花蘭が座っている。

僕は轟さんが座るソファアの延長線上で、彼女と灰火との距離が等しい位置の壁に二等辺三角形を描くようにして、壁に体重を預けながら話を聞いていた。

「少し気にはなっていたのだが、貴女の他にそのような未来視の力を持った存在を知っているか？」

「いえ、見たことはありません」

「そうか」

「どうしたんだい、灰火？ 何か気になることでもあるのかい？」

南萌が灰火のことを『灰火』と呼んでいるところを初めて聞いた。同じ年みたいだし、案外僕のいないところでは呼んでいたのかもしれない。

「いや、ただ興味本位だ。たいした意味はない。それよりも、花蘭。貴女はどうしてこの組織に入ろうと思ったのだ？」

答えたくないなら答えなくも構わない、と灰火は付け加えた。

「……あの、避けられない未来が視えたんです。それを变えたくて」
「それは自分のためか？」
心なし灰火の口調に陰しさが混じる。

「いいえ。私は目的さえ果たせばいいんです。きっと私の最後の役目だろうから」

「そうか、ならこれ以上は聞くまい。貴女も私たちの仲間だ」
「はい」

轟さんは嬉しそうであり、どこか吹っ切れた顔で言った。彼女の目的が何かは分からないが、それは別に僕が知るべきではない。彼女が話したくなったら話せばいいし、助けを求めてきたら出来うる限りで力になればいい。それでいいんだと思う。

「そういえば、灰火」
「どうした、明夢？」

「いや、あのさ、一応僕ら世間的にはテロリストに分類されるわけなんだけど、なんか組織名とかそういうのはないの？」

「言われてみればなかったな。私一人のときならともかく、こうしてメンバーも集めてきた以上、何らかの識別名称がほしいところではあるな。自ら名乗るのもありだが、活動していれば、回りが勝手に名づけることもあるだろう。しかし勝手にへんちくりんな名称をつけられるの困るな」

へんちくりんって。死語じゃないのか。ピンピコピンと同じくらい使われないだろ。いやピンピコピンがどこの国のどのような言葉なのか知らないが、つまりそれくらい使われないだろうということだ。

「だったらこっちでいい名称を決めちゃって公表しようか。」

「ふむ、そうするか。まあ追々決めていくが、なにかいい案があったら私のところまで教えてくれ」

わかった、と全員が頷く。

「じゃあ、一段落したみたいだし僕は調べたいことがあるからそろそろ部屋に戻らせてもらおうよ。では、轟さん、またそのうちにでも」南萌はそういい残して、部屋に戻っていった。しばらく部屋に引きこもるんだろうな。食事も僕が持っていけないと食べるの忘れちゃうくらいだから。

「そうそう、花蘭。君の寝室は私と同室になるがそこだ」

灰火は自室を指差して説明した。

そこで気がついたように轟さんが言う。

「あの、明夢さんはどこで寝るんですか？」

僕が説明する前に、灰火が当然とばかりに言った。

「ん、明夢か。明夢はその辺でな。ソファーか床だな」

大丈夫ですか？　と言いたげな視線を轟さんが向けてきたが、大丈夫ではないと返したところで事態は変わることはないので、軽く頷いておく。

「確かにこれ以上のメンバーを收容するには、この部屋は狭いからな。そろそろ替えるか」

よかった。そのうち僕にも安らかに眠れるスペースが与えられるらしい。

「ま、なんにせよ。私もそろそろ眠るとするかな」

「あの、最後に一つ質問してもいいですか？」

灰火が立ち上がろうとするのを、轟さんが引きとめた。

「ああ、構わない。何だ？」

しかし、年下の仄火は轟さんにまったく敬語を使うことはない（もちろん敬意が微塵とないわけではない）のは、状況的なことでもあるし、彼女が上に立つものの氣質を備えているからだろうか。代表者たるものそういうほうが頼りがいもあるのは確かだし。

「仄火さんは『運命』をどう思いますか」

僕にも質問したやつか。仄火がどう考えているのか知りたいところではある。

「そうだな。私にとって運命とは、過ぎ去った過去の遺物だ」

「『過去？』」

「ああ。昔はそう思っていたわけではないんだがな。そもそも私の父は哲学筋で、私もその手の本は幼いころから絵本代わりで読んでいたのだが」

さすがに絵本の代わりにならないと思うのだけど、仄火のことだから否定も出来ない。

「運命をどのように捕らえるかが問題でな。私は貴女のように未来を見ることが出来ないから、次に起こることを一つの可能性としてしか認識が出来ない。だが貴女にとっては決まりきったことで、順序のようなものなのだろう。だが、それがあると分かっている、その力のないものにとってはやはり分からないのだよ。出来るものと出来ないものとの間には埋まることのない差異があるのだよ。だから運命にはある種の信仰的要素がある。この場合はあるという仮定のもとで話を進めるが、信じるものにとってはあり、信じないものにとってはないといってもいい。ただ、運命が私たちに影響するならば信じる信じないに関わらずそれは私たちに意識下、あるいは

無意識下において影響があるということになる。もちろんその存在を知っているものにとつては信じる信じないもないだろう。ただある。それだけだ。私は昔、運命が人間の個人に干渉し作用するものと考えていた。つまりその人間が本来とるべき行動、つまり運命という筋書きからどういふ事情はあれ、離れようとしたときに発動し、その人間に本来あるべきルートに引き戻すプログラムのようなものだとな。別に神がいるかいなかなんて私の知ったことではなし、人間の無意識的集合が、個人に働きかけるとかそういうことを言いたいのではない。

だが私はその考えを徐々に否定的に考えるようになっていった。運命があるものと仮定して、それは人間の個人に干渉するものではないのではないか、と考えるようになったのだ。つまりこの世界の物語にはある種の道筋が立てられていて、このときにこういう事件が発生するとか、こういう出来事があるなどの、枠組みが決められていて、そこに誰かが関与するというわけだ。分かりやすく言えば、ある時代にとつてもない大発見をした科学者がいたでしょう。そこでの運命とは大発見が起こることであって、特定の科学者が発見するという意味ではない。それは別に科学者でもいいし、子供だって老人だって誰だっていい。とにかく出来事さえ起こればいい。たとえこの科学者が発見しなくてもすぐにほかの誰かが発見するというわけだ。その考えで行けば、私たちも同じだ。私が行動を起こさなくても、私以外の誰かが行動を起こして、同じ結果を起こすだろう。君たちも一緒だ。

まあ、結局のところこの考えもすぐに棄却することとなった。それで今私が考える運命とは最初に言ったが過去の遺物だ。過ぎ去ったもの。決して未来のものではないとな。これは未来視をもつものに適用されないかもしれないがことだが、人々は常に幸福を求め、今の段階より上を目指している。人々は運命を感じて行動しているわけではないだろう。行動をして、その結果を、成功か失敗かは分からないが、結果を通じて運命を感じている。不確定の状態で運命

だからといって諦めるやつはあまりいないし、努力を怠っているやつに運命と口する権利はない。私たちが運命を感じるのは常に行動後によって得られる結果であり、それは過去だ。そしてその積み重ねの道筋こそが運命だと私は考えている。よく運命とは切り開くものというが、それは違う。進んだ先が運命なのだ。そもそも切り開くも何も私に掛かれれば最初から切り開いているというものだ。それに切り開いてなければ、誰かに切り開かせるだけだ。

ふー、少し喋りすぎたな」

以上だ、とポツリと言い、余りの饒舌と内容に僕と轟さんがポカンとしている間に、灰火は自室へ行ってしまった。

灰火、長すぎるよ。

少しの間、僕らは黙り込んでしまう。

灰火の運命説は一理ある。確かにそうだと思わせるところがある。でもきつとそれは違うと思う。どこがどうかは分からないけど、それほど救いがあるはずがない。そんなに都合のいい解釈はだめだ。そんなものに拘泥しては、それこそ自分の首を絞めかねない。

「すごい話でしたね」

「ええ。どう思います？」

「人それぞれの考えで間違いつかは無いと思いますけど。私は運命に束縛されてますので残念ながら過去の遺物とは言えませぬね」

「……そうでしょうね」

「それでは私も寝ますね。すみません、いきなりきて眠る場所をとってしまつて」

なにやら勘違いしているようだが、僕の寝る場所は最初からソフ

アーだったわけで、別に灰火と一緒に寝ているわけではない。一つ空気があったのにだめだったんだから。あたりまえだけど。

「いや、気にしないでください。おやすみなさい」

「はい、おやすみなさい」

せめて夢だけは良いものを見ましょう。
お互いに。

B side 2 — 1

現在、僕達の組織はホテルを転々としていた生活を止めて、とある場所に定住している。辺りに住居はなく、閑静な地域だ。実のところ、メンバーの一人が持っていた私有地で完全に山中にある。

そのひっそりと外界の影響を一切受けないかのように感じさせる建物は、無駄に広い本棟とそこから渡り廊下で繋がっている六角形の別棟が両側に隣接してある。庭には数種類の作物が栽培されている畑と、そのすぐ近くに小川が流れている。

こういう環境にいと、全てを忘れることが出来る……といいんだけどね。

南萌^{みなも}と別れたあと、僕はいくつかの相談事項と話し合いの為、花^か蘭^{らん}さんを探していた。いつもは庭周辺にすることが多いのだが、先ほどは姿がなかったので自室にいるのだろうか。

本棟の階段を上り、二階の廊下を歩いていると声が聞こえてきた。

「ドローツー！」

一階大広間^{はしめ}かに気合いの入った声が響く。
一さんの声だ。

大広間は吹き抜けになっており、二階からでも下の様子がハッキリ分かる。

やっているのは【USO】と呼ばれるらしいローカルカードゲームだ。

【USO】のルールは慣れてしまえば単純だ。カードには通常カードと特殊カードがある。

通常カードは四種類の色のどれかと0から9までの数字の組み合わせになっている。

特殊カードは場に出すと様々な効果を生み出すものがあり、相手に山札からカードを二枚引かせる『ドローツー』、相手の順番を飛ばす『裏金』、時計回りと反時計回りを入れ替える『賄賂』、色を変えることが出来る『闇金』。

手札は七枚前後で、場に出されたカードと同じ色、または数字のみ出すことができる。特殊カードの場合対応する色があれば場に出すことができる。

特殊ルールとして、一番最初に山札から表向きに出すカード以外は基本的に裏向きで場に出すことになる。ちなみに特殊カードに関しては表向きで出す。だしたプレイヤーは色と数字を宣言するが、宣言内容と出したカードは異なってもいいのが特殊ルールの肝となる。

そして手札に、相手が場に出したカードを改めることができる特殊カード『嘘だ!』があれば、場に出たカードを確認し、宣言と同じカードの場合、今まで場に出されていたカード全てを自分の手札とし、宣言と異なる場合、場のカードは宣言者の手札となる。特殊カード『嘘だ!』は自分のターンに使用せず、使用時には山札からも取り除き、そのゲーム中には使うことができなくなる。

特殊カードはそのほかに、『嘘だ!』でプレイヤーが失敗した場合にプレイヤーの手札にせず、そのほかのプレイヤーで一度だけ分担する『連帯保証人』、三ターンの間全てのカードを表向きにする『この人、痴漢です』、二ターンの特殊カードを使えない『経営破綻』などがあり、使いどころが難しい。

このゲームは心理戦と運、戦略が重視される。いかに嘘つきであり、それを悟られないか。恨みを買わないようにするか。

中々奥深いゲームである。

一さんが持ってきた海外のゲームらしいが、どこかで見たような内容なので、大方コピー商品かもしれない。楽しめれば関係ないか。

しかし、三人でやるゲームではない。推奨人数は五人以上だ。

一／金さえ払えば何でも運ぶ地理関係のスペシャリスト。

紫月和／自己矛盾を内包した最強の調停人。

遊皆／灰火のブレインであり友人の少女。

僕としてはどうにもやりにくい面々が集まるのはどうにも奇妙な組み合わせな気がして他ならない。

行われているカードゲームは非常に白熱した雰囲気醸しだしていた。

「甘いぜ、そらドロツー」

和さんが、名称を付けるとしたら『天空落し』とでも言えそうな豪快な技をくりだした。

無駄にカッコいいのはあの人の特権だろう。

順番は時計回りで、次は不敵な笑みを浮かべた遊皆の番だ。彼女はあらかじめ裏向きにして別に伏せていたカードに手をかけ、ひっくり返した。

「特殊カードオープン。ドローツ。とつとと六枚引いちゃいな」

「まだ負けてねーよ、ドローツ」

「まだ持ってたのか、運び屋。もう九敗もしてるだろ、さっさとあきらめろ、ほらドローツ」

三人がただ単純にカードゲームをするはずがない。おそらくは罰ゲームでも決めているのだろう。

「とつとと負けて恥を晒して、ジュースをオツカイしちやいなドローツ」

遊皆が勝利した時は、飲み物を買いくらし。実際のところここは山奥なので、本当に買いに行くとしたら山を降りなければならぬ。最低二時間はかかるだろう、僕なら。一さんならもっと早いと思うけどそれでも行きたいと思うはずはない。

「いや、ありえねえっての。お前はともかくこの変人の命令はどれだけ過酷だと思ってんだドローツ」

「変人だと？ 生まれてきたこと後悔させてやろうか」

和さんは誰よりも強いのに、短気だから手のつけようがない。言葉が通じないタイプは僕としては遠慮しておきたいものである。

和さんがテーブルにドローツのカードを投げ捨てる。

この人は間違いなく有言実行型だ。

先に折れたのはやはりと言うか、一さんだった。

「悪かったよ、罰ゲームくらい受けてやるよ」

彼は世界一の運び屋かもしれないが、戦闘力で考えると決して高

い部類ではない。和さんと戦えば塵芥ちりあくたの仲間入りになるかもしれない。

「じゃあ急いで買いに行つてね」

と笑顔のまま命令するのは遊皆であった。彼女が一番恐ろしい存在かもしれない思った。

まじかよ、と呟いた一さんだったが彼女が本気であることが分かった、脱力してそのまま大広間から出て行くのであった。

不意に少女が顔を上げた。偶然かもしれないし、視線を感じたのかもしれないが、僕と遊皆の視線が交錯する。その笑顔という名の仮面からは何も読み取れなかった。

半ば避けるように顔を背け、僕はあの未来視の元へ歩き出した。



二階からの観戦していた明夢あきむが去った後、遊皆と和が話をしていた。

「もしアタシが負けたら、なんて命令する気だったんだ？」

「あなたにおつかいさせてもつまらないからね、そうだね、あなたの心の内を晒したいかな」

和は露骨に嫌そうな顔をした。

「かわいい顔してえげつのねえやつだな」

「ふふ、冗談に決まってるでしょ。そんなこと知ったって役に立ちそうにないし。それよりあなたは私になんておねだりするつもりだったの？」

色々と言いたいこともあったが、それらには目を瞑り、和は静かに聞いた。

「おまえは、いやおまえらは何を知っている？ 何を隠している？ ここまできて気になっていた疑念をぶつけた。」

「あたしがききたいのはそれだけだ」

和はそれだけ口にする、どこかへ歩いていってしまった。

遊皆が敗者ではない以上、質問されようが答えることはない。

ただ彼女は笑っていた。

面白可笑しそうに心から。

「私たちが何を隠しているか。知ったら驚くかもね、ふふ」

独白は誰に聞かれることもなく、虚空へと消えた。

B s i d e 2 - 1 (後書き)

U S O は U N O + ダウト + α のようなゲームです。
どんどんカオス化してる。

B s i d e 2 - 2 (前書き)

短めになっています。

訳の分からないつくりをしていますが、全て読めば理解できるようには最低限していきます。

B side 2 — 2

花蘭^{からん}さんの部屋は片付いているというよりは物がほとんどなかった。ソファ^{ソファ}ーはあるけど、テーブルはないし、棚一つない。

向かい合わせではなく、横並びに設置されたソファ^{ソファ}ーに僕と花蘭さんは座っていた。互いに顔を見るわけではない。ただ暗くて何もない外を見ている。

分かっているからだ。

だからこの会話は前座でただの確認作業だ。

「……じゃあ、新しい本部に関してたこんな感じですか？」
僕は南萌^{みなも}とも話し合った、新本部建設地について花蘭さんにも確認を取った。

「明夢^{あきむ}さん、敬語」

「こんな感じでいい？」

花蘭さんとはアレ以来、会うたび敬語を止めるように言われている。花蘭さんのほうが年上なのだが、見た目はさほど変わらないので、違和感がないといえはないのかもしれない。

「はい、よく出来ました。それで反対意見はありませんよ。特に問題はないようですし」

「自分は敬語なんだね」

「ええ、もちろん。今のところは」

多少気になる発言だったものの、今はとりあえず脳内の隅っこに追いついておこう。

「僕らの本部に関して何か視えたの？」

僕らの仲間に加わってすぐは、僕の影響のせいかな、正確性を欠如したり、まったく視えなかったりしたけど、今はそんなことはないということか。

「はい。最近は調子がいいみたいで、ただ相変わらず明夢さんののは視えないんですね」

彼女は嬉しそうに言った。

「うん。それでいいと思う」

いや、そうでなければ困るのだ。

視えて未来が確定してしまったら、僕がこうしている意味がなくなってしまうかもしれない。

……とりあえず確認は終了。

ここからが本題だ。僕が訊くことを視ているのだろうか。黒坂明夢という不確定要素が加わるだけで見えなくなるならば、視えていないと思う。

でも結局のところだがどちらであっても問題ないし、どうだっていいと思い直した。

「轟さん、一つ訊いていいですか？」

あえて敬語で質問してみる。

「……花蘭」

顔を膨らませ不満顔で訴えてきた。

「花蘭さん、一つ質問します」

彼女は頷く代わりにこう返してきた。

「答えたら明夢さんも一つ答えてくださいね」

「……分かりました」

僕は思い出す。あの時の光景を、出来事を。
そして。

「？それで、花蘭さん。あの時、××の時、本当は視えていたんじゃないですか？」

僕たちに危険が迫っているって。分かっているながら、黙っていたんじゃないですか？」

声を荒げるわけでもなく、独り言のように淡々と。顔は動かさず、横目で窺う。

花蘭さんはその時を思い出すかのように、瞳をつむり、考え込んでいた。本人にも理解出来ないことでもあったのかもしれない。

花蘭さんは何かを決心したかのように、瞼を開け、言葉を紡ぎ始めた。

僕では知りえぬ、そして、僕だから知りうる説明を。

B s i d e 2 — 3

「……というわけです」

途中で口を挟む余裕すらなく、ただ聞き入っていた僕は、そこでようやく話が終わっていたことに気が付いた。

「そうか。そういうことか」

考えられる限り最悪のケースだった。花蘭^{からん}さんの話はおそらく間違いないだろう。そう、彼女が言うのだから間違いない。ゆえに最悪。

想定範囲というだけでもまだましかもしれない。あの時いった灰火の投げかけが気になった。ただの偶然だとは思う。別にありえないほどのことでもない。

自然発生と人工発生。両者に違いはあるのか。

ないのだ。人為的な発生でも結果が同じならば、それは自然発生と同じことだ。

問題は使い方。

確かに理論は完成している。南萌^{みなも}も間接的に関わっていることもあるし、不可能ではないはずだが、まだまだ未完成の代物だ。強引に起動式を打ち込んでも、思わぬ事態を誘発するリスクは拭えないし、対象への負荷率が高いのは言うまでもない。

ならば何故、あのシステムは起動しているのだろうか？

いくら、完璧な式とシステムがあったとしても、適正というもの

がある。

あれはほんの一握りの人間しか扱うことができない。適合者は知る限り一人、いや二人か。それだけ希少な存在だ。

しかし現に起動は確認された。花蘭さんが確認した。

あの場で発動する意味。希少種に負荷をかけてまで必要なことだったのだろうか？

あるいは、はなから高みの見物を決め込んでいるのだろうか。

死んでも、構わない。いつでも使えるという意思表示。

明らかな……だ。

つまり情報がどこからか漏れた？

いや、それだけはいえな。ありえてはいけないのだ。審査もしている。直接は彼女たちだが僕も確認している。

スパイがいないものと仮定した場合、可能性として、警告と立場の再確認といったところか。

表立っては動けない以上は仄火の計画に追加修正する形で、××を××しかないのか。

だが失敗すれば——はない。切り札は持っていてこそ価値がある。使い切ってはすでに価値が存在しない。

問題は見極めのタイミングと嘘と情報。

ここからが正念場といったところか。

「あの、明夢さん？」

しばらく沈黙していたため、花蘭さんが声をかけてくる。

「ああ、すいません。少し考え事をしていたもので」

「何を考えていたんですか？」

「それは質問の対価としてですか？」

いえ、ただの興味本位です、と花蘭さんは否定する。

「それは……そうですね、貴女は既に関係者ですから、説明を受ける権利があります。出来れば聞いてほしくはないんですが、それは僕の私情ですから。夜御飯の後、またここに来ます。説明はその時でよろしいですか？」

「……はい」

考え込んだ後、花蘭さんはゆっくり首を縦に振った。

「ああ、そうだ。僕が質問したからその代わりに一つ質問してください」

質問は決まっています？ という問いに花蘭さんは肯いた。

『明夢さん。私と初めて出会ったホテル。憶えていますよね』

それは確認作業。

『私はあなたと出会い、この組織に加入しました。その四日後、火事がありましたよね』

これは将棋に似ている。

『私はあなたの影響で外界の状況を視ることが出来ませんでした』

あるいはチェスだろうか。

『幸い、怪我人一人でない火事でしたが』

その一言一言が王を追いつめる。

『まるであなたは火事が起こることを知っていたかのように思えるんですが』

これで王手。またはチェック。

『その上で訊ねます』

別に勝敗に執着するつもりはない。先へ進むため。では進むための最善策は。

『明夢さん、あなたはホテルの火災をおこしましたね』

別に王でもなんでもないので責務は即放棄してもいいが、意味のないことをしても意味なんて本当にないので。「意味の意味」と「無意味の無意味」が同じか違うかを論議するぐらい非生産的だ。それにたとえ同じ状況になったとしても恐らくは僕は同じ選択肢を選ぶだろう。あの状況ではあれが最善だった。全員を守るためにはあれしかなかったのだ。だから。

「ああ、僕がやった」

素直に僕は認める。

「なぜやったかを訊かないんですか？」

「質問は一つ。そう言う約束ですから。話したいなら聴きますよ。今日の夜にね」

本当にこの人には敵わない。
「考えときますよ」

A s i d e 3 ー 1 (前書き)

ルビが多いので、パソコンの方は文字サイズを大きくすると見やすくなると思います。

A s i d e 3 — 1

轟^{とんほうき}さん仲間に加わってから一週間が経過していた。カレンダーは一枚捲^{めく}られ季節は夏。地球温暖化現象か、はたまたヒートアイランド現象なのか、都会の夏は随分と暑い。しかし僕はホテル暮らしなので関係ないはず……だった。

都内某所、というか公園。

「あゝきいゝむゝ、あつい」

僕だって暑いけど、話す元気さえあまりない。

緑地化計画の一環なのか、遊具よりも自然が多いこの公園にて、現在とある組織が隠れるようにバテていた。

さて、あの札束で扇げる環境から、一変してホームレスさながらの環境に没落してしまったのには、もちろん理由がある。

「しかしー、アレがじこだったのか、じけんだったのかー、タイミングとじょーきょーをかんがえーみるにー、やはりー、じけんせーがーたかいとーおもーけどー」

日差しにあたらない屋根の下にあるベンチで横たわっている仄火^{ほのか}はコーラ不足（本人曰^{いわ}く）の為、投げやりな口調で呟いた。

アレ。事件。事故。

三日前の夜に僕らが暮らしていたホテルは全焼した。幸いなことに（結構危なかったけど）僕らは助かった。

僕らは警察に捕まるわけには行かなかったし、怪我して救急車に乗せられるわけにもいかなかった。

轟さんの未来視の能力を用いて窮地を脱することが出来たのだ。僕がいることでノイズまみれだったそうだが無理をさせてしまった。

「やっぱり事故ってことはないと思う。多分灰火の想像通りだと」暑さを紛らわせる為に裾を動かし、服の中に空気を送る灰火。かなり勢いが強い。女の子だからそういうことはしないで欲しいが、するとも言えないので、僕は目を逸らすしかない。

「かのじょがーくわわってから。つけられたかなー。んーしかし」それはないとは否定できない。あるいは既に現在地を知られていたのかもしれない。リークされたならややこしくなってくるが。

屋根のおかげで直射日光こそ防がれているが、無風状態なのも相まって体力的にはかなりキツイ。それにいつまでこの状況が続くのかを想像するだけで精神的にもなかなかくるのだ。

うう、と病人顔負けの呻き声を発する灰火は一旦意識の外に押し出して、公園の入り口に目を向けると、二つの影がまっすぐこちらに向かってきていた。

右側に先行する形で鬼無里南萌きなしみなも、通称『鬼』と言ったら半殺しにされます。左側、南萌にすぐ後ろを伴侶のように付いて歩く女性が轟花蘭からん、通称『……特に思いつかなかった。

南萌はジーンズにタンクトップとラフすぎる格好（初めて見た）で、轟さんは暑さを全く感じさせない清楚感漂うブラウスとスカートである。

二人は両手に持った袋を木目のテーブルに置き、僕、灰火とテーブルを挟んで向かいのベンチに腰を下ろす。

「ふー、いやいや、君たちが動くわけにも行かないのは分かっているけど、まさかこんな弱い女二人に面白い物に行かせるとは、明夢あきむの株は大暴落だよ。ウォール街も吃驚の驚天動地だ。コペルニクスの転回ものだよ」

大暴落らしい。

「いやはや売っておいて良かった」
売却済みだった。

「それは冗談として。はい灰火、例のものだ」

南萌が取り出したのは、黒いアレ。普通にコーラなんだけどね。ガバツと灰火が起き上がり、コーラを受け取る。飲む様子を見る限り、本当に暑さではなく、コーラ不足が原因だったのかもしれない。

「なんだいその物欲しそうなシャチホコみたいな顔は」

僕が灰火のコーラを凝視しているとでも思ったのか、南萌が僕に謎のツツコミをしてきた。

「いや物欲しそうなシャチホコの顔が全く分らないんだけど」

南萌の中で僕とシャチホコの間にとのような共通項を見つけたのかは定かではないけど。

そもそも南萌は何かを例えるのが絶妙に下手だ。意味不明を超えて一つの才能と化している。

「で、僕の飲み物は何？」

この場合、飲み物があることを前提とした質問をしている。さすがに無いということはないだろう。だってさー。

問題は何を買ってきたかだ。野菜ジュースとかだったら泣くかもしれない。

「慌てるな。まずは花蘭は紅茶だったな」

灰火Ⅱコーラという式が存在するように轟さんには紅茶が相応しいだろう。続いて取り出した最高クラスの味を誇るコーヒーはおそらく南萌のだろう。

そしてようやく南萌が袋に手を入れ、僕の前に飲みものを置いた。

「……」

それは紙パックだった。一リットルだろうか。白を基調としていて、動物のイラストだ。

……牛乳だった。

側面に手を当ててみるが冷たさが全く感じられない。

南萌が悪意を感じさせない期待を込めた眼差しで見つめてくるのでパックの片側を開けて一口飲んでみることにする。コップはないので慎重にゆっくりとだ。

この常温でしばらく放置したかのような温度と円やかな舌触りがマッチングしてなんとも……

「不味いに決まってるだろ」

もったいない、と言うよりは出すのが躊躇ためらわれたので、飲み込みました。

南萌を睨んでみるがウインクで返された。効果なし。いや分かっ
ててやってるだろ。

「んー？　なんだいそんな苦虫みたいな顔して？」

「苦虫みたいな顔ってどういうことだよ！」

それを言うなら苦虫を噛み潰したかのようなだと思う。想像上の虫になれるほど僕の表情は豊かに出来ていない。

相手にしては埒が明かないので、牛乳はひとまず戦略的放置
することにして、灰火に目を向ける。

現在、飲み物にしか興味がない彼女はこの状況を打破する策があるのだろうか。多分何一つ考えてないんじゃないかと思う。

呑気に飲食しているときに、恐ろしいことを考えられてもいい気がしないが。

最近気が付いたことだがけど、灰火はコーラ不足に陥ると、いつもの鋭さやかたさが無くなり、なんと言うか可愛らしい普通の女の子に見えるのだ。というか駄々っ子？　なんとなく見守ってあげたくなる感じだが、不用意に近づいても害を被るので、コーラを手土産にすることで、いや、するといつもの灰火に戻ってしまうわけか。

とりあえず距離を保ちつつ、見つめてみる。

仄火がこちらを一瞬見るが、僕よりもコーラの優先度が圧倒的に高いらしく、特に気にすることなく飲み続けていた。

すると、「ん、ん」とわざとらしく咳払いが聞こえたので慌てて顔を上げると、発生源は案の定、というか消去法的に南萌だった。

「いやーあついねー、まったく勘弁してもらいたいね」

手を団扇代わりにして風を送っていたが、僅か^{わず}にこちらに向けた視線とタイミングからこちら、というか僕に対して言っているのは間違いなかった。

これ以上、からかわれるのも勘弁して欲しかったので、話題転換を図ってみることにする。

「そう言えば、南萌。財布は？」

ホテル全焼事件によって色々と焼失してしまったが、そこには組織の資金も含まれていましたとさ。

けしてめでたしとは付け加えられない内容。いや他人事じゃなくて当事者だからな。宿泊代支払わなくてラッキーとか喜べるわけもない。

それで残りのお金と言えば僕が持っていた財布だけだ。その財布も現在は彼女たちに預けている。

とりあえず、牛乳を南萌側に移動させつつ対応を待つ。

たしか中身は、火災の前に買い物用に準備していたのであり、内訳は確か。

福沢さん六人。樋口さん四人。夏目さん七人。そしてなぜか首里城が……単位は何だろう。一城とかでいいのかな。それに硬貨が数枚ほど。

買い物に行ったのを差し引いてもまだそれなりには残っているだろう。

南萌は渋々と言った様子で、財布を取り出し渡してくる。そんな

にお金に執着する性格ではなかったはずだけど。ちょっと使いすぎたとかかな。

財布を受け取り中を確かめる。

……あれおかしいな、奥の方かな。……なくね？　ないよね。

「南萌、お金がないみたいなんだけど、別にしてる？」

と信じたい。あるいはサプライズか、財布の紐を握りたくなったのか。

「……………」

顔を背ける南萌。まさかという思いがよぎる僕。無干渉を貫く轟さん。二本目のコーラに入った仄火。

落してしまったのか、あるいは盗まれたのだろうか。

ガサガサ。

南萌が座るベンチにあったビニール袋が、勝手に動き出した。風もないのに、まるで自由意志をもったかのようだ。

「あ、いや何でもないだよ」

そう言っただ袋の中に手を入れる南萌だが、それが返って怪しい。その程度ならまだ良かったかもしれないが、直後。

「ニャー」

「えっと」

袋の中から、間違いなく猫の声がきこえました。

「……………」

場が凍る。

「ニャー」

融解させるために南萌が、猫の声真似をした。

カワイイ。仕草も恥ずかしそうにしながら真似ているのが高ポイントです。……ってそれどころじゃない。

「南萌。手遅れ」

「やっぱり？」

そうして袋から出されたのは、正真正銘生後三ヶ月ほどの子猫だった。種類はベンガルだろうか。ブラウンスポットの毛並みは整っていてつぶらな金色の瞳はとても可愛らしい。好奇心旺盛でテーブルの上から周囲を見回している。

南萌は子猫を抱いて撫でる。猫は鳴いて気持ちよさそうに手足を伸ばしていた。ワイルドそうな見た目とは違い、人懐っこい性格のようだ。

「済まない二人とも。この子のキュートさにやられてしまった。反省はしていない」

最後余計だから。南萌の目は本気なのでいまさら返すことはできなさそうだ。

結局のところ、南萌は他にも袋を隠し持っていたようでは猫の餌やペット用品が一通り揃えてあった。出来ることなら轟さんに止めてほしかったのだが、ここまでの笑顔のなか空気を読めない発言をするほど僕は無粋ではない。

食べ物には今のところ困っていないが、さすがに今後も公園で寝泊りするのには困る。僕だけならまだしも女性陣はキツイだろう。

南萌と轟さんが猫を撫でている、その光景を非常に羨ましそう見つめている仄火に僕は現実をぶつけることにした。

「仄火、どうするつもり？」

「わわ、なんだ？」

驚かせてしまった。猫に触りたいが、勇気が出ないのかもしれない。見た目豹っぽいいところあるから怖がっているのかもしれない。

「これからのことだよ。当面の生活資金さえ怪しいのに、ずっと此処にいるわけにもいかないよね」

仄火は分かっているとばかりに頷いた。

「君たちにも役割があるように、私は基本的に頭脳労働が資本だぞ。そのくらい考えるに決まっているだろう。とはいえ私も奥の手は使いたくないので、花蘭に任せてみよう」

頭脳労働と言った割には他人任せなのはどうかだろう。

「明夢、何だその目は？ 私のことを使えないとか、思っているんじゃないだろうね？ 未来が視えるなら結果を教えてもらった方が楽に決まっているだろう。君は目の前にテストの答案用紙が置いてあるのにも関わらず、わざわざ解くつもりなのか？」

例えばが極端な気もしたが、概ね理解できる。だが未来のとりうる行動を見た時点で既に未来が変わる可能性があるということに気がつかなければいけない。最善が最悪に取って代わる災厄。

杞憂だろうが、僕はそれを知っている。

僕が答える前に、仄火は轟さん呼び頼んだ。

「それは構いませんが、明夢さんがいると見えにくいですよ？」

仄火の近くにまで来た轟さんはこちらにちらりと目を向けて答えた。

「そうか、それは明夢が近くにいるという意味か、その未来において明夢が関与していると言う意味のどちらになる？」

僕はなるほどと感心しつつ、なんとなく向かいのテーブルに座っている南萌を見やる。普段は絶対に見せないような破顔で猫と遊んでいる。昔同じ学校に通っていた時でさえ滅多にお目にかかれなのおもわずドキリとしてしまうほどの笑顔だった。

「どちらも影響があると思います。正確な比率はその事象しだいですが明夢さんの介入率次第でいくらでも変わってきますので」

「ならばやりようはある」

仄火は僕に離れていってくれと伝えてきた。

僕は公園の入り口近くまで歩いた。距離にして百メートルほど。

これだけ離れば大丈夫だろうか。三人の姿を捉えると、轟さんが頭の上で手で丸の形を作っていた。

後は待つだけか。もうベンチは嫌だ、布団で眠りたい。

僕は切実に願うのだった。

A s i d e 3 — 1 (後書き)

猫いいですね。名前何しようか考え中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1876o/>

世界のやさしい壊し方

2010年11月9日05時25分発行